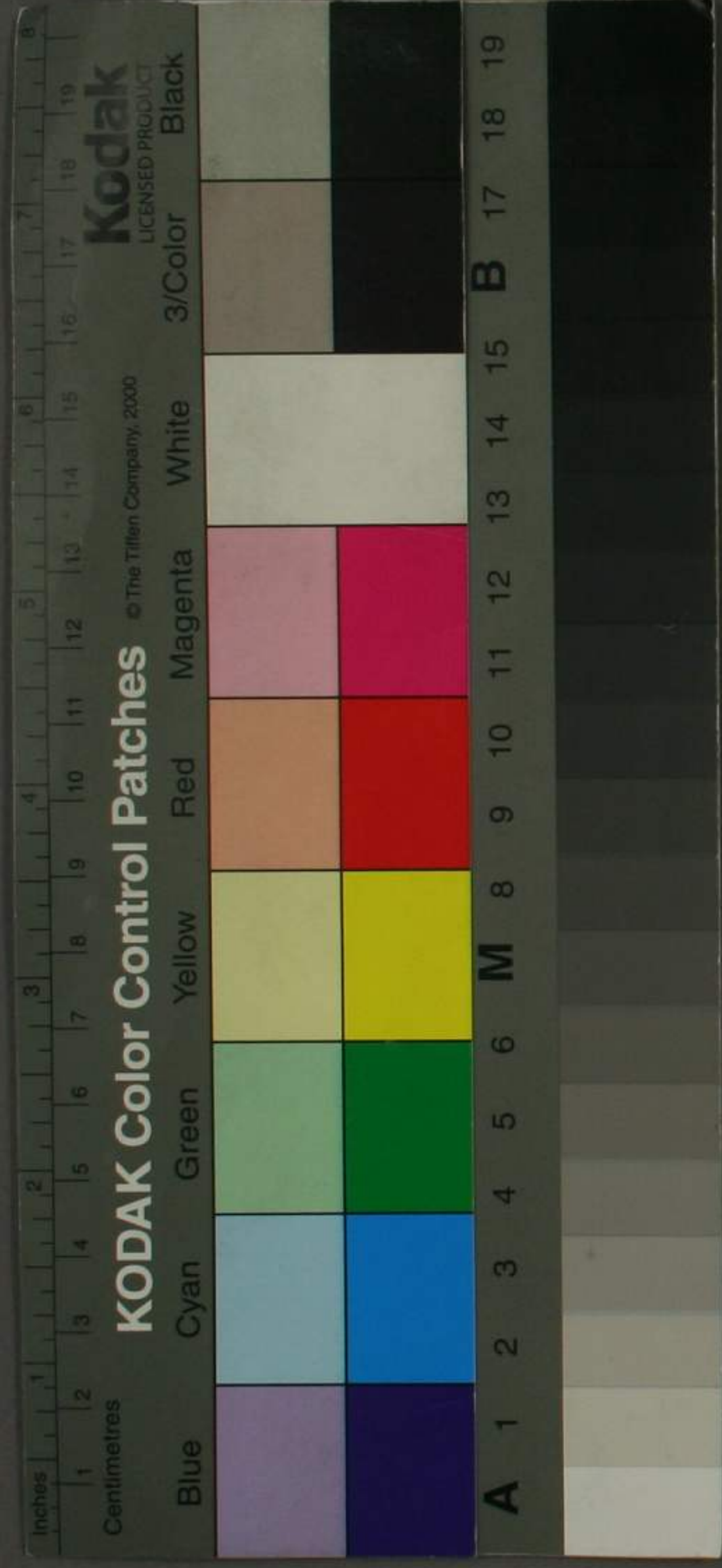
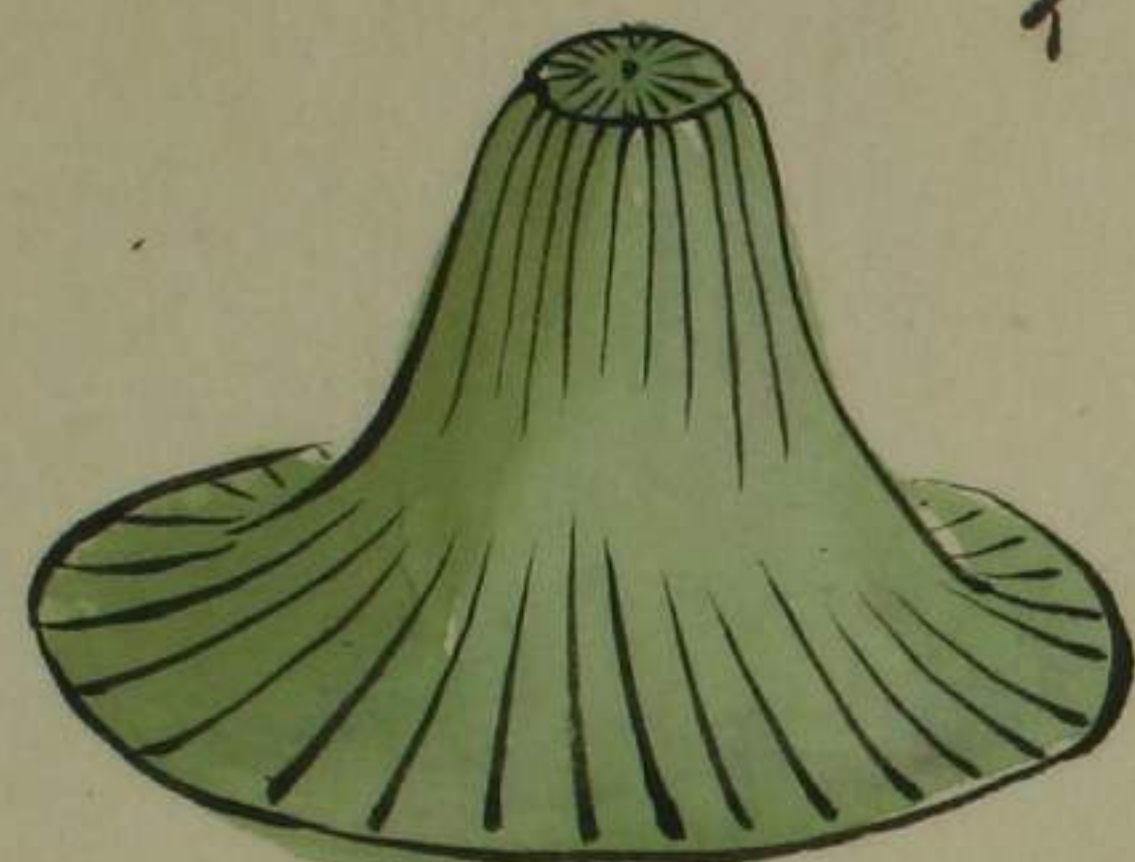




笠之事

(イ) ヱ笠ト号ス男セ冠ニ分ナリ
備後蘭ミラ製スルヨシノ木ノ
ノ用ナリ作り好メタル故ニ
ユノ木トナリ



(ロ) ホノ木ト号ス女セ冠ニ分ナリ
備後蘭ミラ製スル同々木綿
ノ紺染素ニナリ



(ハ) ツンブ笠ト
名大極
一尺才有之
山行ニ用ユル
笠ナリ尺サ蘭
ノミミラ製ス



昭和三十六年
四月十日
購求

に)

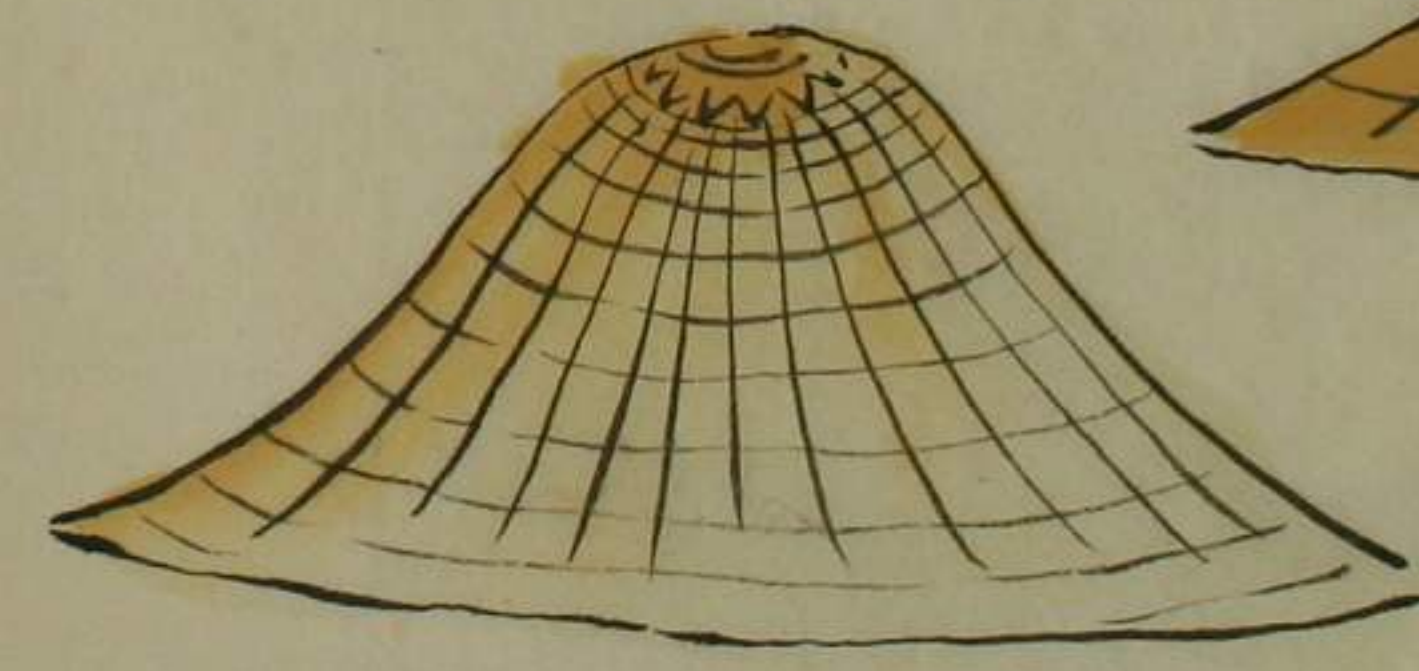
クボフ五竹ノ皮ミ制衣ス
奥獵者舟ミテ冠ハニハ
凡ミ取らんコトナシト云フ
平五ハ凡葉ヲアトナリ



へ



ホ



い)

平五ト云竹ノ皮ミ
制衣ス舟ミテ冠ハニハ
凡ミ取らんコトナシト云フ
スト云

(ホ)

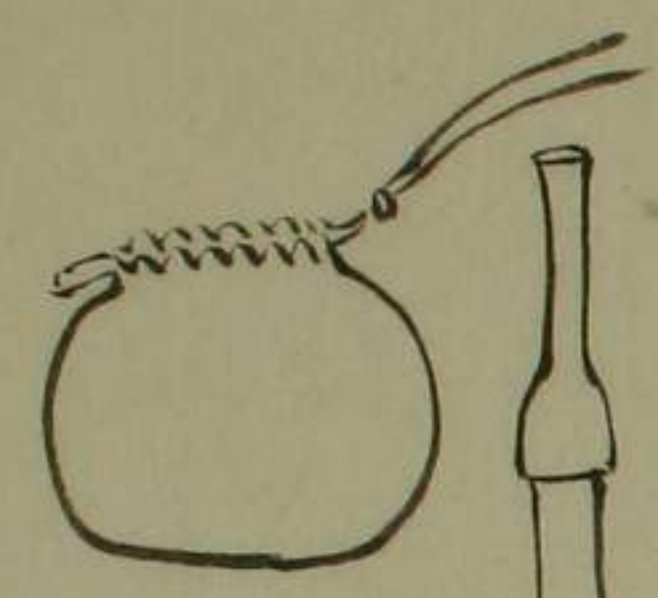
平五ト云
竹ノ皮ミ
制衣ス

唐新天照

アサリガ
一四



杖ニする故烟管と如是制衣ス



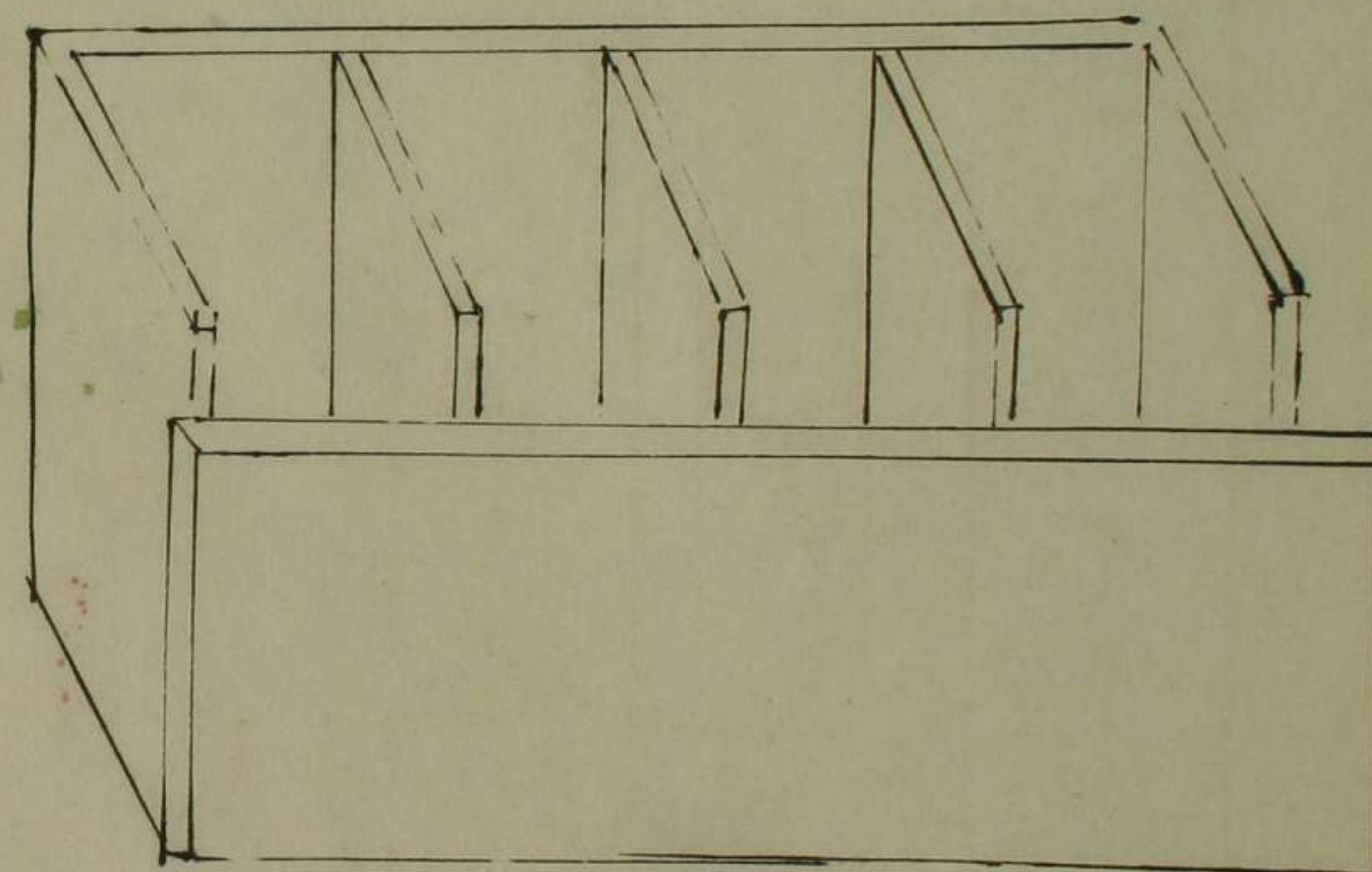
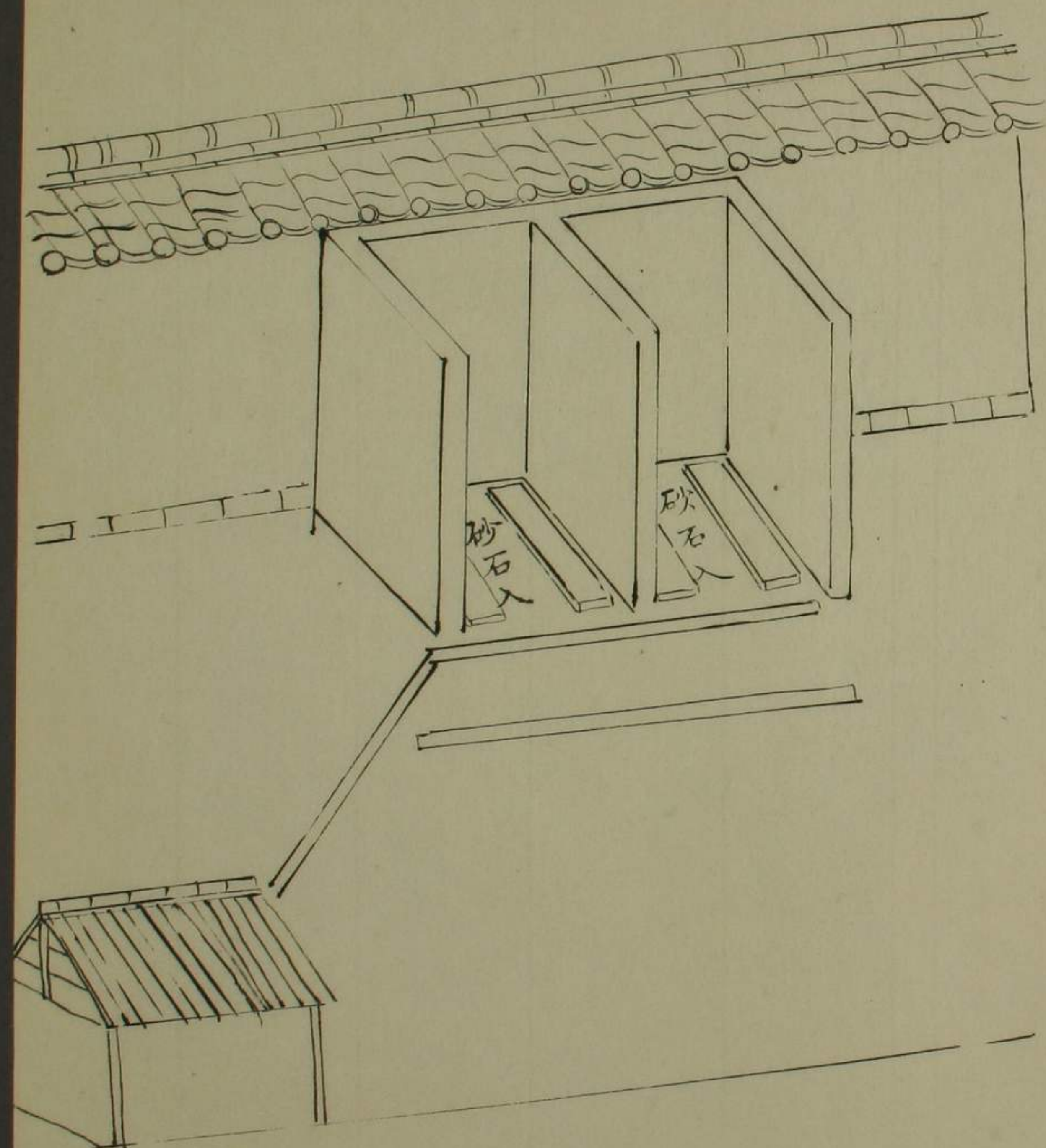
女の耳如是
銀の環を下
る



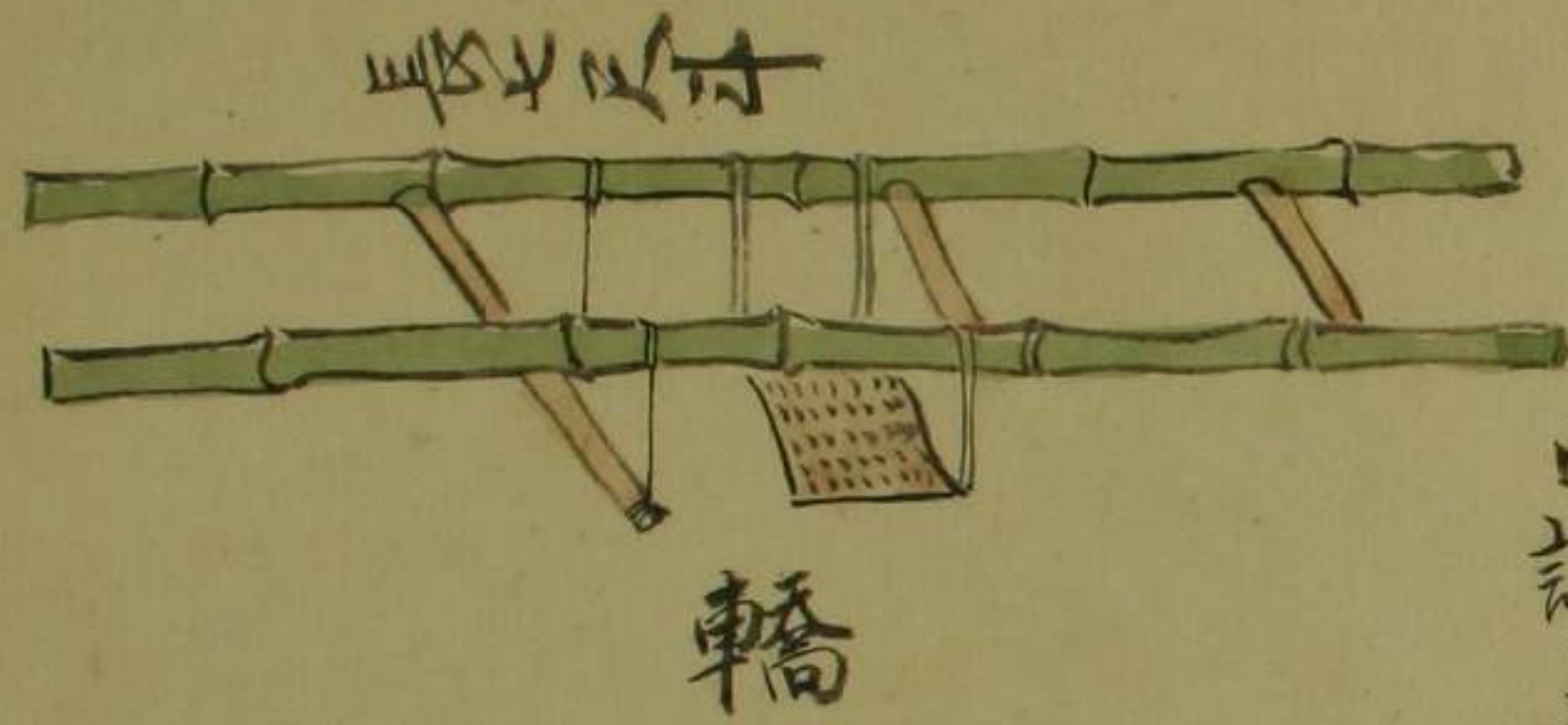
女は銀の輪
を入る



女足如是
細くを指先
手と同やう
輪をカる



唐新木照

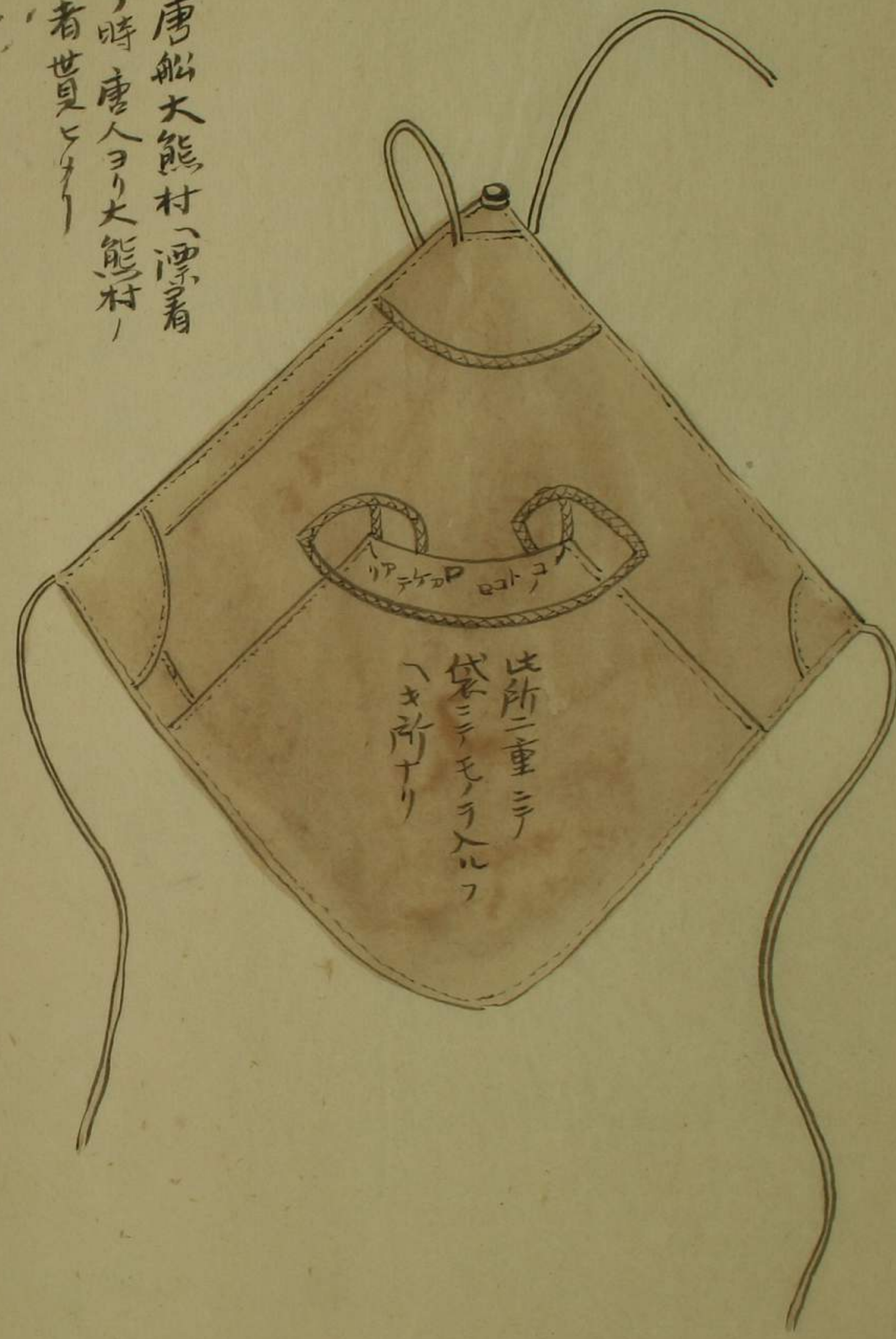


轎之事
日記
李



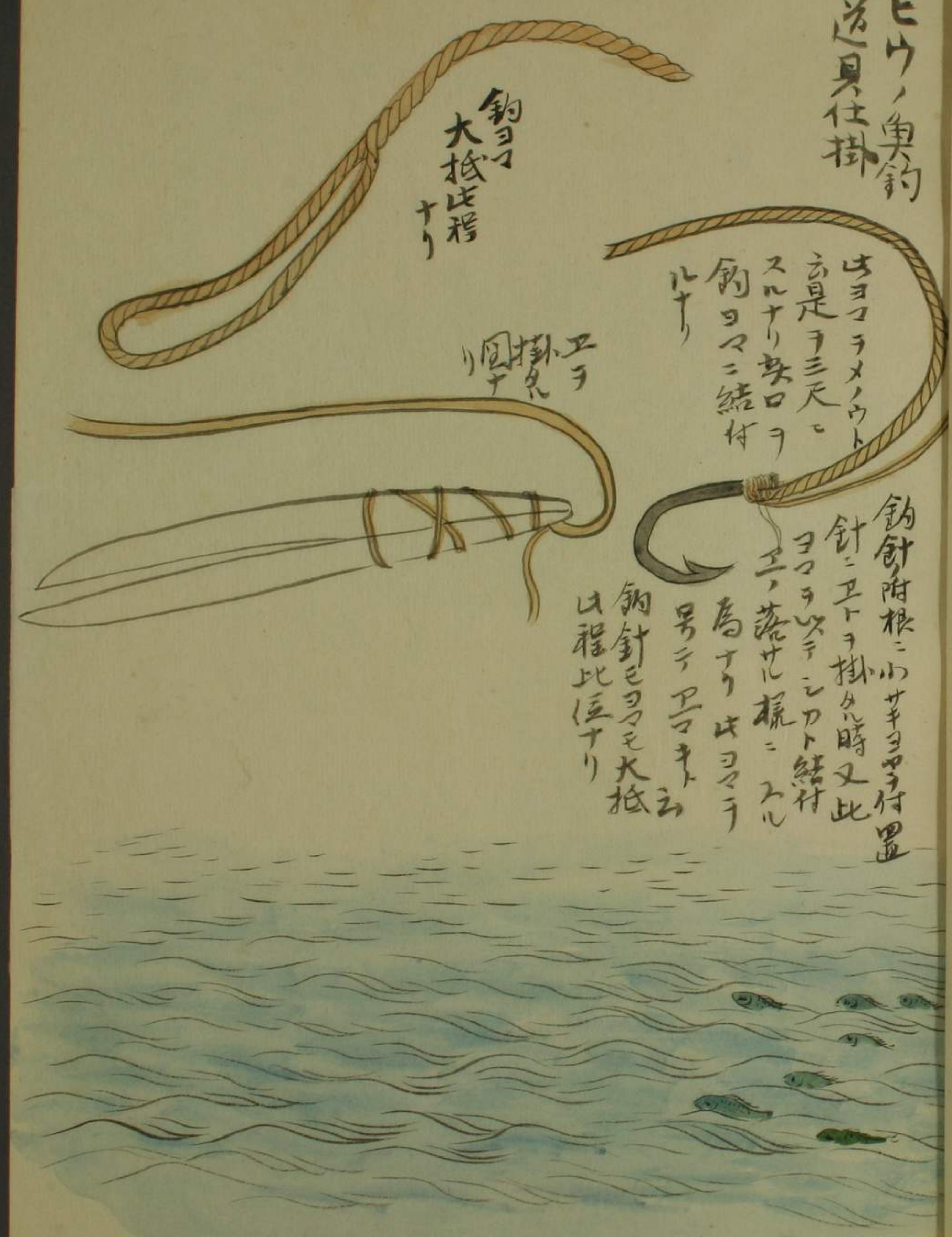
山芋畑地ヲ掘ク
打テエリ又追々
掛テ如図

唐船大熊村へ漂着
 時唐人ヨリ大熊村ノ
 者世見とナリ



此所三重ニテ
 袋ニテモナレル
 ハナ所ナリ

ヒウノ魚釣
 送具仕掛



釣ヨリ
 大抵此程
 ナリ

エラ
 掛ル

ハヨコヲメノウト
 是ヲ三度ニ
 スルナリ又口ヲ
 釣ヨリニ結付
 ルナリ

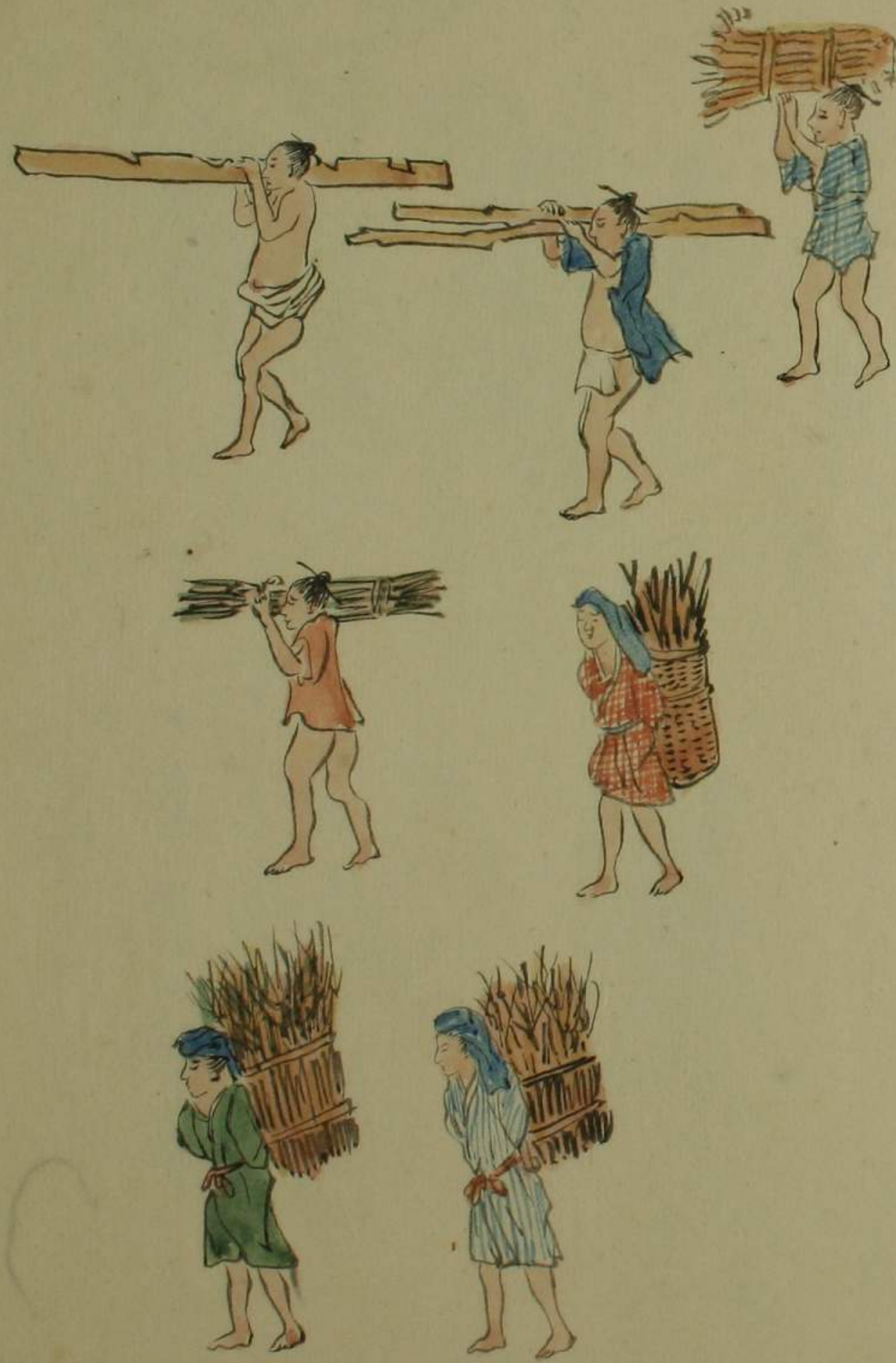
釣針附根ニハサキヨリ付置
 針ニエトナリ掛ル時又此
 ヨリナリテシカト結付
 ナリ落サレ様ニスル
 為ナリハヨコヲ
 号テエナキト云
 釣針モヨモ大抵
 此程此位ナリ

三四月に潮ノ干ツマリニ穴ワリト
 云ル奥隈リ道ハ此島ニテ穴ト云ル
 回ノ如キモノ海底ヨリ生タル汐ノテグ
 マリニ出ル其処漸ク尺位汐ノ漲リ
 タル中長三寸位ヲ以下ノ奥
 其内ノ中ニ指ル故ニ生タル穴ノ
 所ハ此回ノ如キ竹ニテ製作シタルモノ
 中ニウエルテ居置五六回モ先ノ
 方ヨリ其内ヲ搦ニテ突刺迫寄
 バルニ其ノ亀ハ必ズ逃入ル其時
 取上ルナリ



一、ツンギヤロ五月より九月頃まで釣最中は八月より
 一、ヒウは九月より十月まで同釣より
 一、ソウヂマツヲ釣ルツンギヤロモ大振こしく釣ル
 十月より霜月師走最中ナリ
 一、正月より二月三月ツラハヘキ魚ヲ取網ヲ取ル也
 一、四月より鰯突
 一、夜流シテ六月より八月頃ツテホトリキネハリムサ
 白魚是より仕掛替ル赤魚大和ベムツ焼ニ
 活エミラフル赤ツメムシツメ
 一、エラフナ三四月頃釣

ササ之事冬照



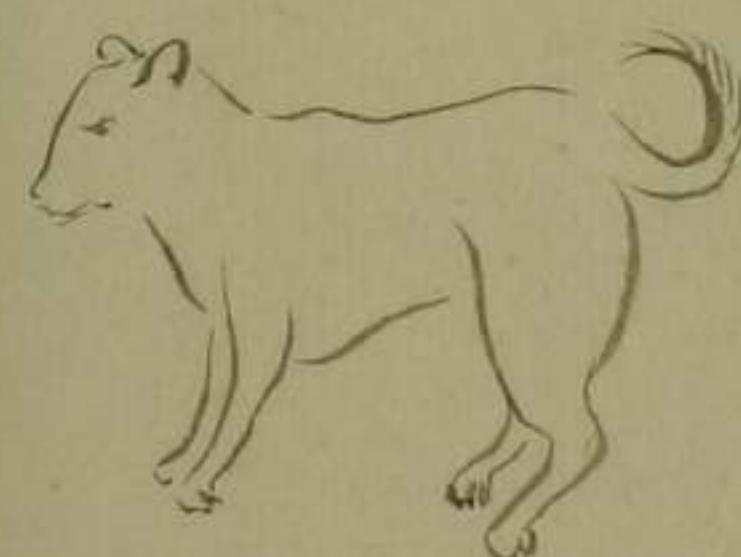


テダナ

唐辛畠うちたけ
畠に生るもなり

○海甲浅水ノ辺ニナルトテ國ノ如キモノ
海ニ生ヌレリ潮干ノ節ハ水ノ
ウレ出ラ小舟モ自由ナラヌ程ニ過分
ナリ是ヲ取テ白灰トナス、製法法ニ
記ス

手拭ふ

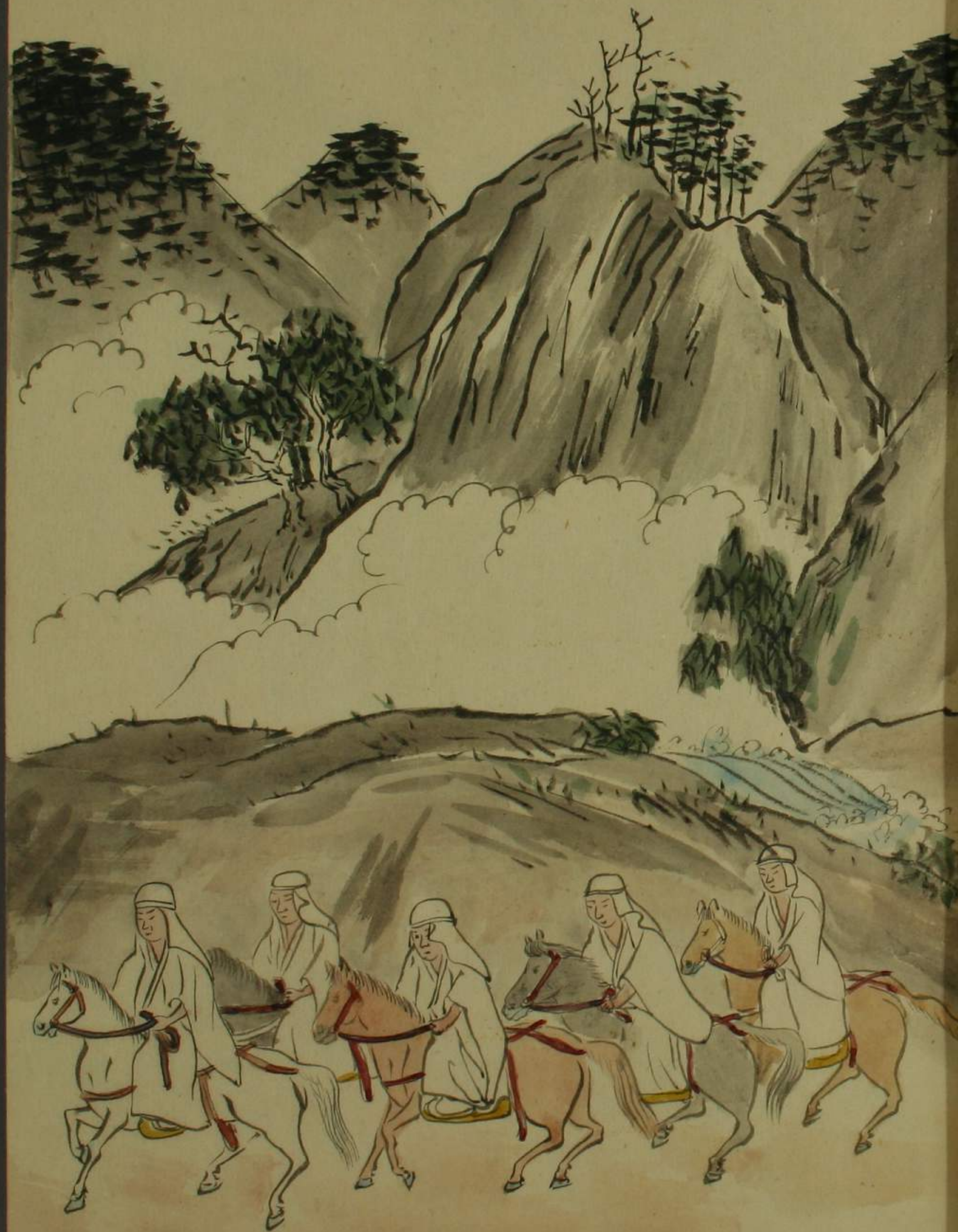


フケント遊び



サングノヤマノ キヨリク

遊び



朝焼タニタ焼ハ朝ニ至リテ取ル、花アリテ 潮ヲ鍋ニ入シテ
 湧シ能ク湧タルハ右ニ焼キタル ウルヲ桶ニ深サニ三寸程棒
 ミラツキ崩シ入シ又ウルヲ同位ソケ類ニ入シテ右ノ土潮ニ
 サト漬ラ桶ニ入レ突崩シ古土潮ニ漬カシ穴ト漬タル穴ト
 互ニ縁重モ入シテ突込上ニ置キテ押込シテ蓋ヲナシ石ヲ
 重セ置ハ一日モシテ自然ニ崩シ最上白灰トナシ土潮ノ場
 至湯ニラエヨシニ潮程ナシト云ヘリ



ウル

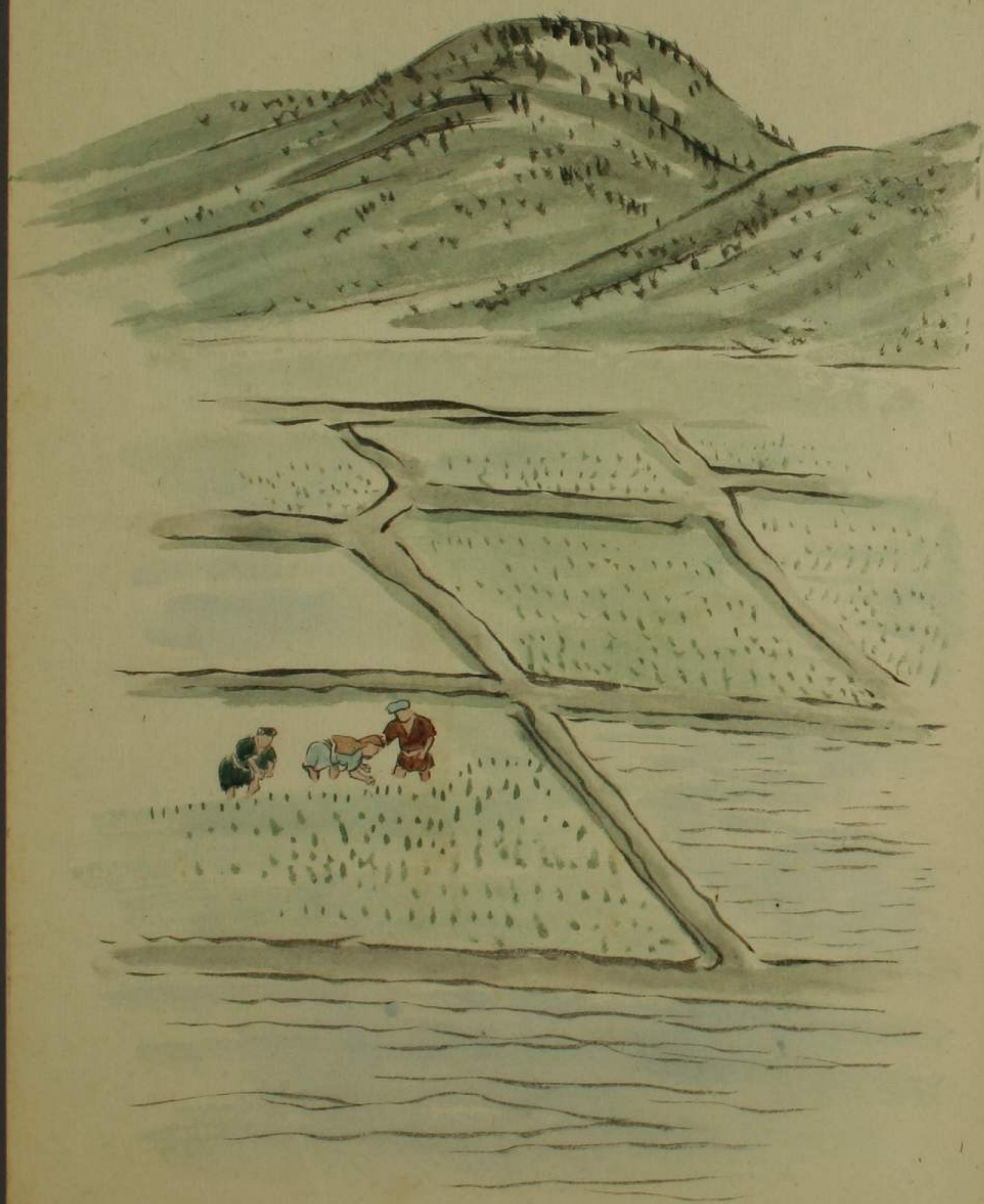
ヲ焼キラ白灰ヲ取ルニハサテラ
 積立テ其上ニウルヲ積立テラ
 白クナル程焼キ能ヤキラ退ル
 ト云フ事ナシ







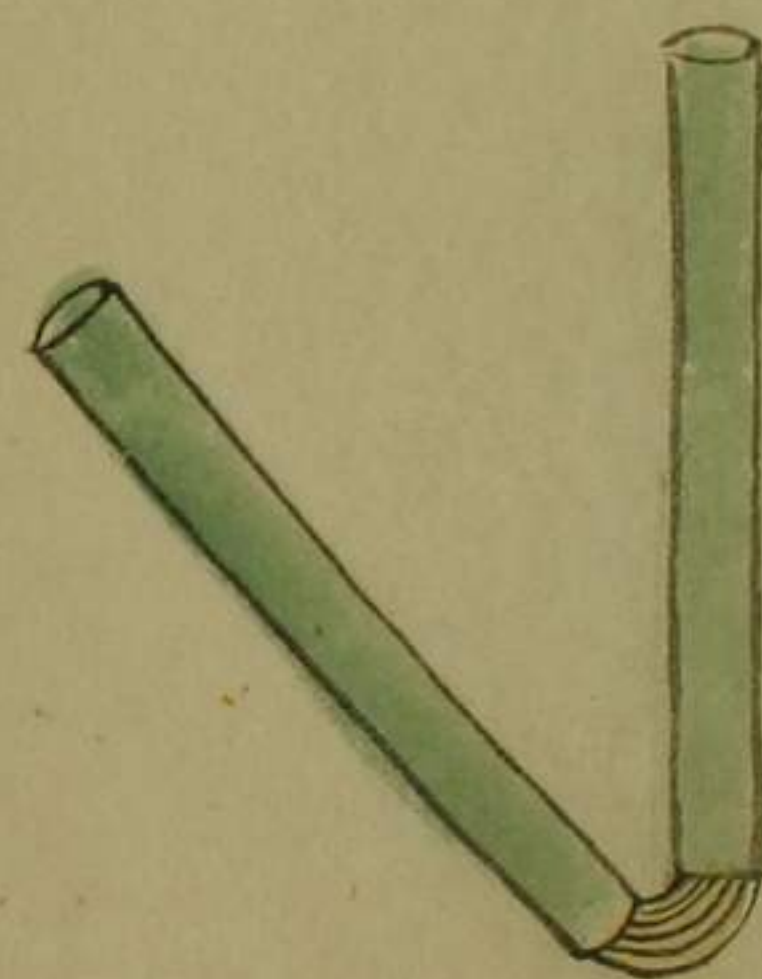
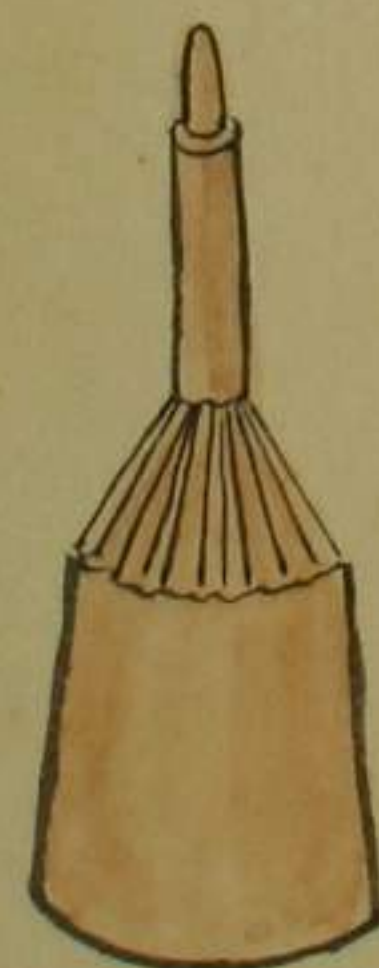
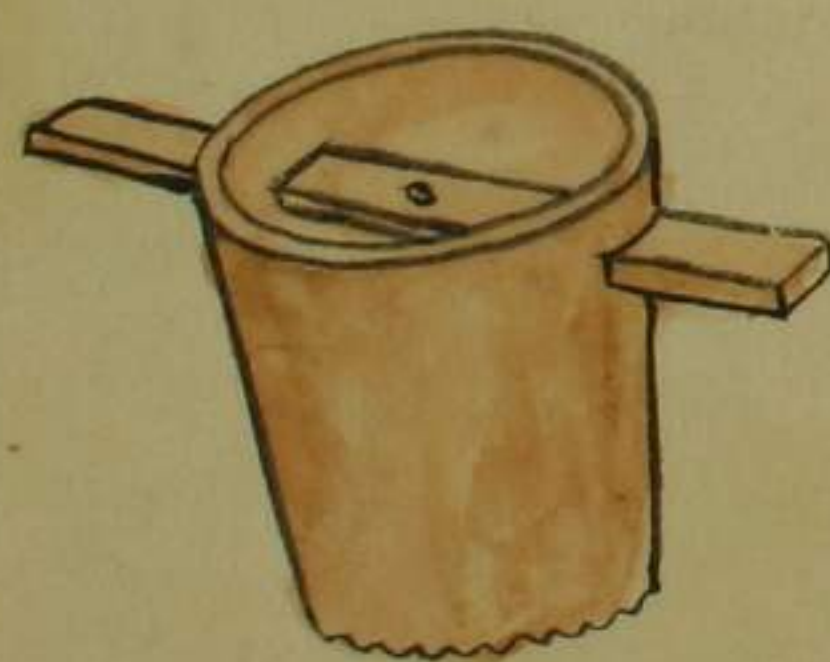
或る字の中、表紙に大崎漫筆、大島見聞録、大崎竊見
 と三つ並べ、其の題は大崎竊見とし、先づ高頭之事、鳴中
 常飯米の事、高配の事、郷士高の事を順に記し、次に耕芸
 之事を記し、次に直に「大島見聞録」の以下につづき、甘藷煮調り事を
 終り、此の部合だけ、系中の事を何れも述べし
 庶幾島嶼立回書飯茹本、
 満



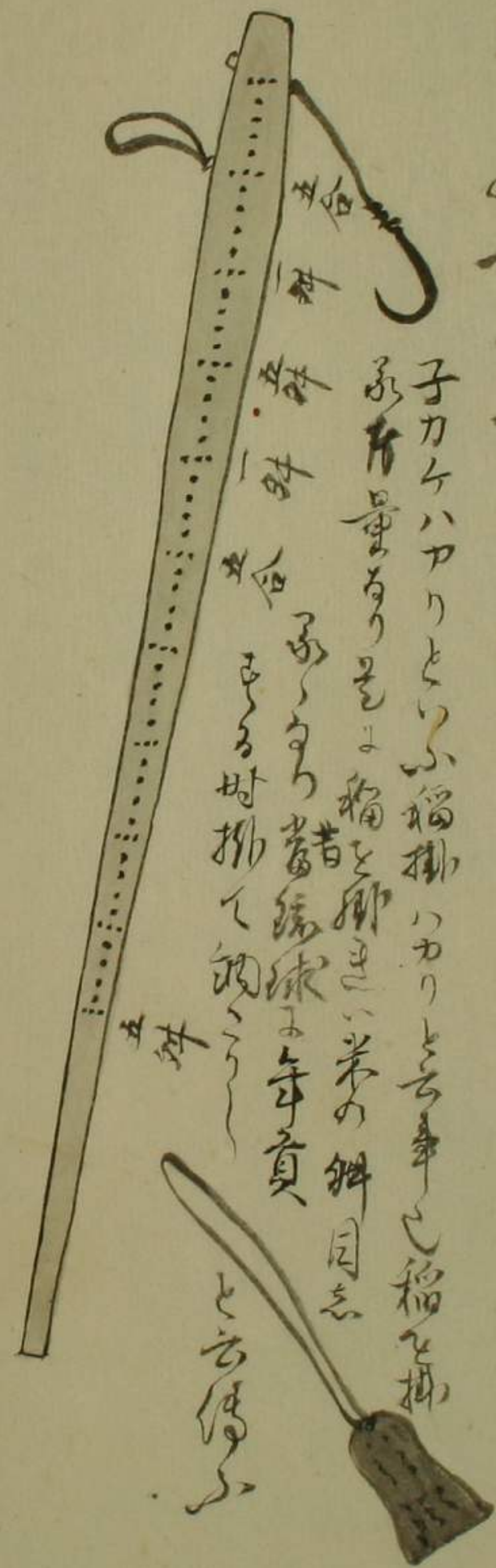








まても女どもとて舂或舂やし事を知らる
 もの稀と云ふと云ふ皆ツガと云ふ
 一ツガニツガより十ツガニツガニツガ四ツガ五ツ
 ツガと云ふといふニツガニツガ四ツガ五ツ
 云々某倭國より漢軍言某々といふ薩
 藩といふ通言をなけれは薩藩の通手に付て
 云々此云某と云々

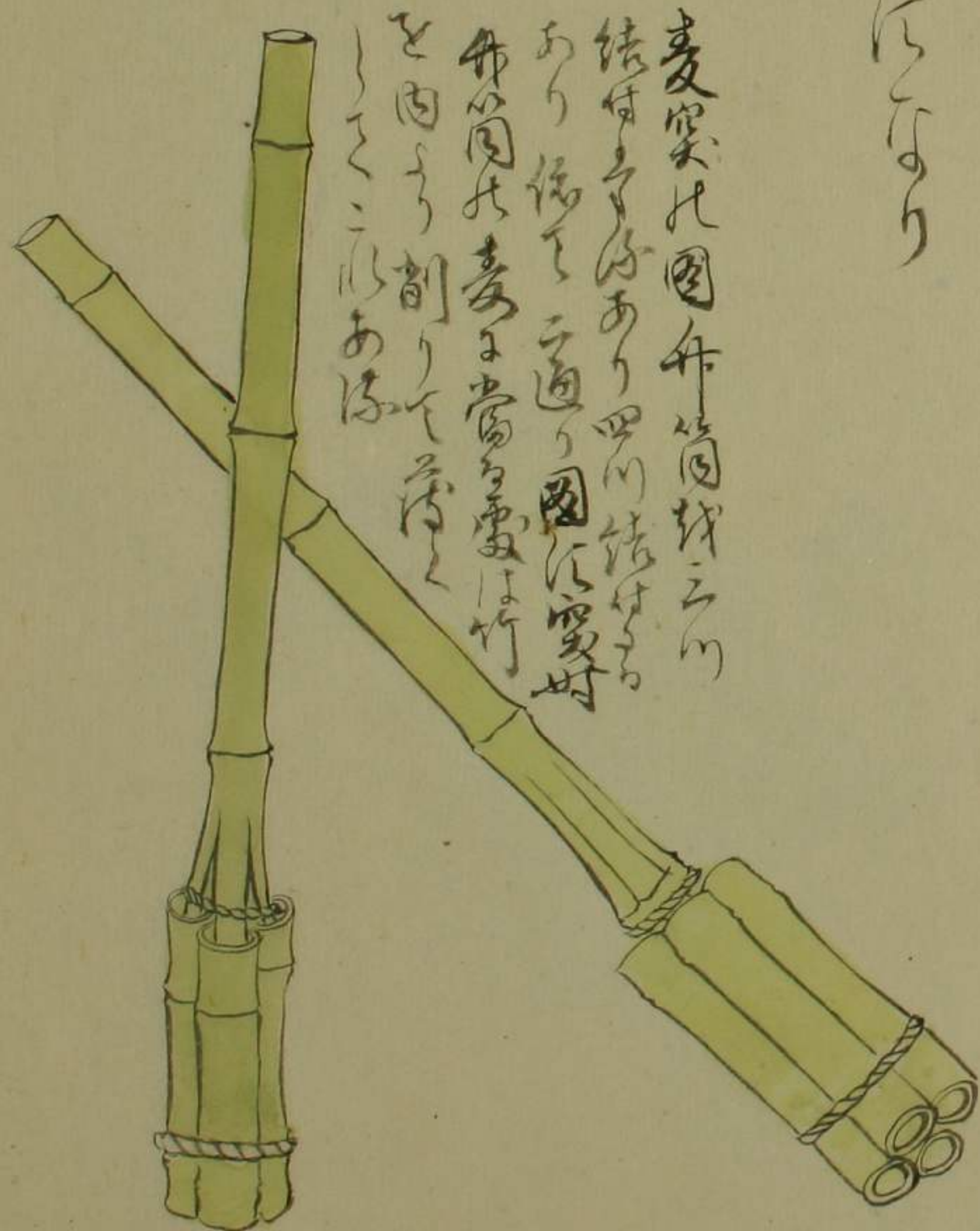


○麦作地事

麦九月末より 極始十月末霜月師走までは
 極りたり極方地次第の先畠をホクホク
 間よりより 漢と堀其漢の内又五寸間
 斗り宛る肥と一掘りづつ入るてそと
 麦を十粒斗はく 畠なり九十月前には
 三月熟し 霜月師走時より四月熟しと
 云々麦は人糞或は馬糞を糞す砂状

交へて用ゆるなり麦の熟するまじく、麥の
 熟する時、と入り、霜月師走、毎十粒
 此もの二十粒も、毎うさひた、熟生ひと
 入り、麦の半熟する、所なり半熟する
 所、此の諸島の食ふ事と、思ひて、なりた
 ありて、先きに熟する、穂より、皮を、摘み
 取り、熟する、及び、時刈、取り、なり、穂
 と、熟する、は、麦、突、といふ、國の、如き、者、是

麥の熟するなり



麦、突、此、國、并、筒、枝、云、の
 結、付、る、所、あり、四、の、結、付、る、所、
 あり、俗、に、云、通、の、國、に、麥、村
 并、筒、枝、麥、は、當、る、處、は、竹
 と、因、り、割、り、て、是、と
 云、ふ、所、あり







○蕎麦地麦

蕎麦の地高は極少なり。倉元太郎云
少やうしては者名瀬沼切に村に居住し
て蕎麦を極する事何と云ふ今に
寒地境に熟あるものなれども寒なり
熟せず。此の地は多量蕎麦といへる
乃ある事我知る人稀に況ん見たる
人食一多量人極少なり

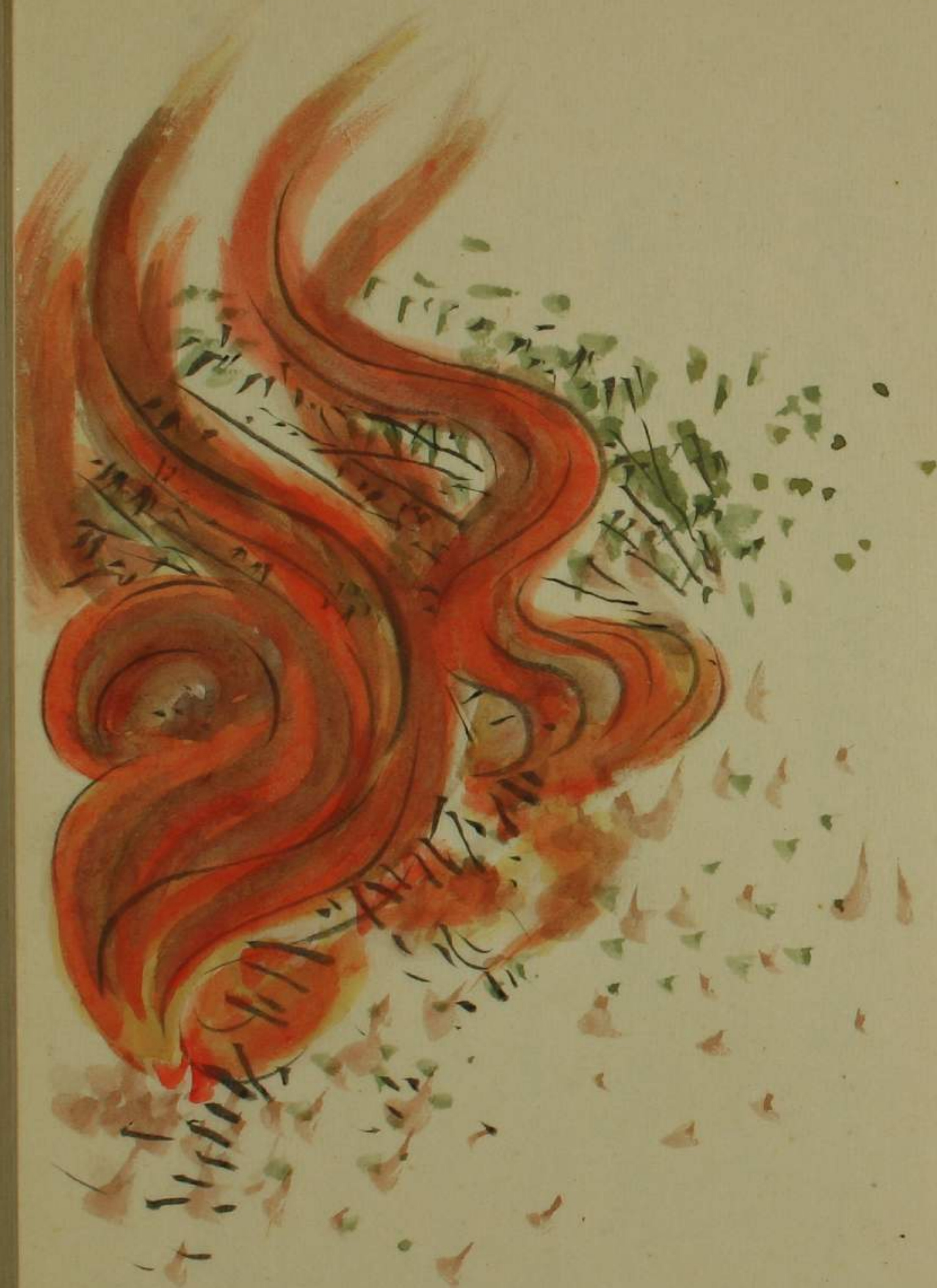
○粟地麦

粟は蕎麦を島中作ふは解粟あり。粟作
は作ふ余り多作する者なり。石斗し
作ふ人稀なり。事とて珍なり。粟
を作ふは山にありて十日斗し
ふ粒を海に火を付て焼き山に
少し。播廻し種を耐ふ耐付の時
師走末より二月中なり。粟種あり二三

寸毫問ある様は前事ふれと通何れ
厚く生ふ所生ふと進み思きりし我
板取より都て進み能なりて總た
少といふ留焼にる跡に之は能を
ても能分能なりと云焼耐きに留余
深くお時正肥しなりて粟
少少にとなりて進み左は能様なりと
問、眼を伝ひて極るあり此方満作なる

を見たり

一中は島の古きつとひし大嶋へ海
流るを問ひ彼島粟焼過か工作
所し能程多し能出来るなり彼
島何方を舟山のとなりし我なりたを
し能て枯る時火を掛て焼いま
だへ切能焼りて肌足するを所
能き内はなりぬあとう粟を耐く



只考ふまゝに粟焼て用ゐるまゝに 起をたひ
 けく見事にあふるまゝに 此所やうなる
 こゝろ粟を焼て 焼る 俵白田を打込
 りなるとなり

山畠の事

を貳里の畠山に畠成極へて諸侯職を
 至る能く出来るなり 其畠成の
 次より七八尺廻りの大木を
 山を云ふ五丁廻り斗り此難削し難
 枯しを云ふ火を付焼山を云ふ大木
 此本木斗り細り云ふを又切集て焼
 米考より云ふ迄く唐辛を才一作粟

大根

其根は焼く海に昌と云ふ人

黍

砂糖黍

赤ゴシヤ

里芋

藍生芋

玉

其印野

菜類

芋

煙

芋を極よ一年中葉

出く

芋

下

芋より名産し

と

芋

名

つ芋と山畑芋

ふ

色

芋

芋とありて芋

ふ

芋

芋

芋と七八年

芋

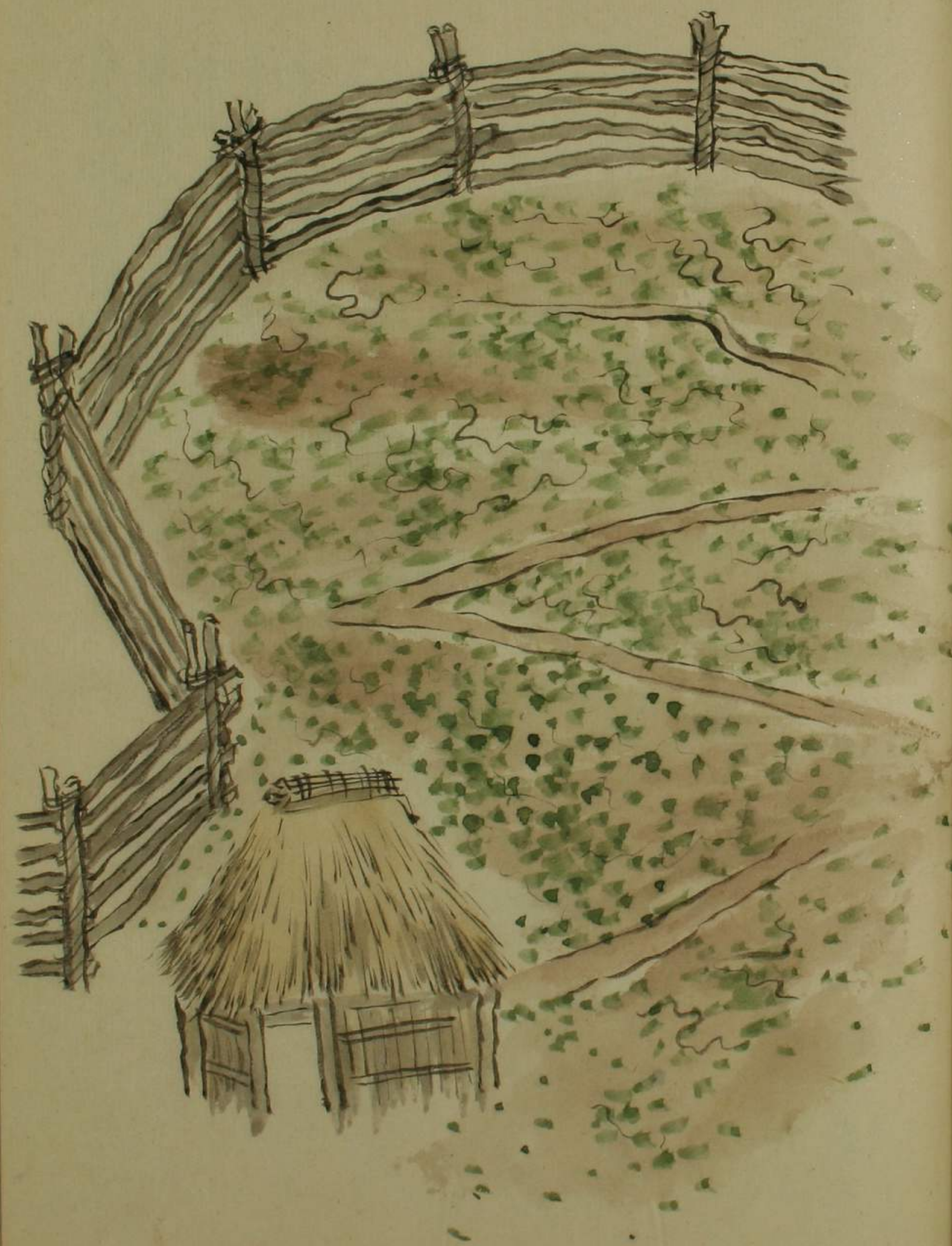
芋

芋

芋と砂糖

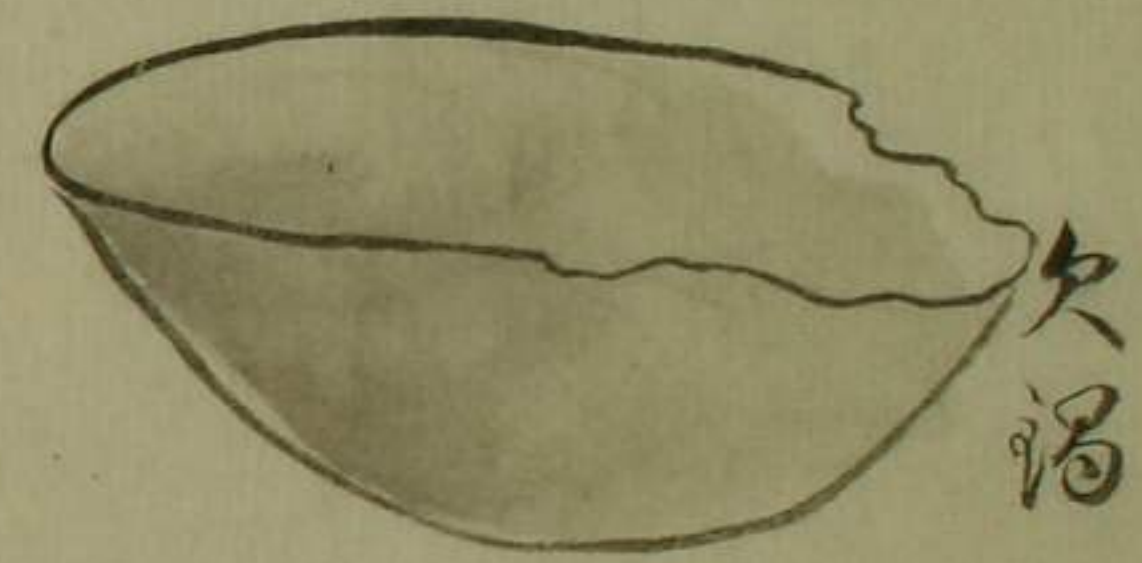
桑と栲槍と栲と僅な多も砂糖を取
り其廿又右に如くお山畠を仕
得之務其如く山中乃所なる畠
数多有り此山畠乃仕明方存式なる
べし本年計前より山を薙倒し置け諸木の
枝は其田より薙し有り或は朽腐なる
多存なる有り此等なる時夫を切集
て焼出し作をせし一桶に焼きとふ

三年の只腐らざる本は根をくちを
けりあきこの山伐焼出に事山多
り此多なり滅し惜し材木と見ゆ山は
猶完地障り上薙けきる地をくち
防ぎ残餘地とくちあるあり之等
所廻り畠を惣く一貳尺廻り大木を
横し長々四尺斗と範圍廻り至て
手際入地なりかくまきとあるも畠廣

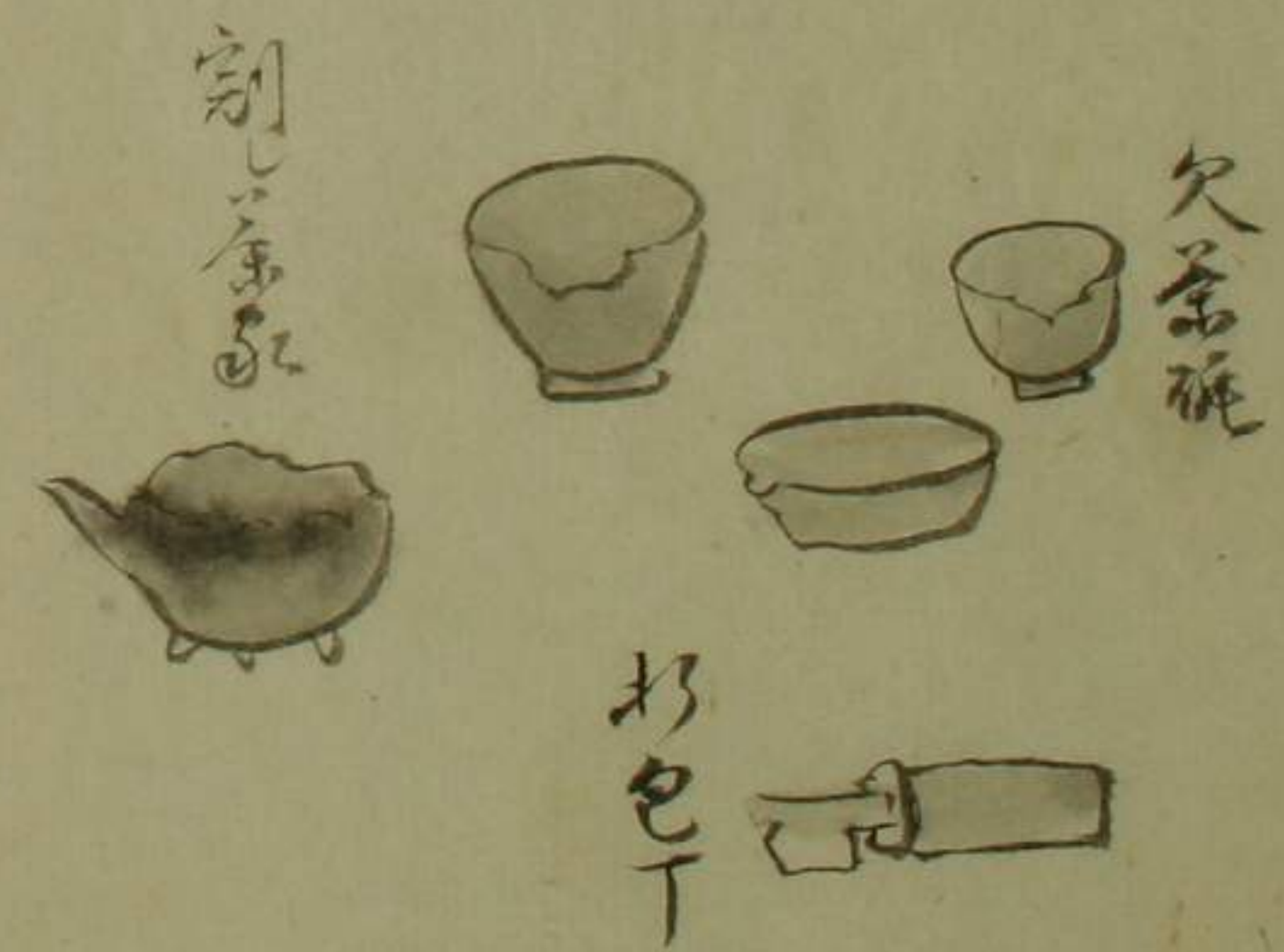


きりし間を破り入りて猪の^がうりあはれまは是れ
推の^が実りまは是れ推の^が実りまは食ふ猪の^が櫛
まは是れ

山島入付黒物地
 國何れも中絶
 害破りし道具を
 持てしむる時
 時人知ぬ事の
 下る落し事
 事ある事
 事ある事
 事ある事



欠湯



欠茶碗

お色下

割し茶碗

○甘藷の事

甘藷と大島よりハンス又トシと云唐草
 とふ言辭と誤りトシとふなる一は昔
 唐國より伝へたるものなりと見ゆ薩
 隅日唐草其の倭名乃通名薩摩草
 琉球草とふ事其出所あり名と
 一なるものなり琉球草なり
 喜界島の赤甘藷をハアバンスワハ白甘

蔗

〔補清〕

之夜即音極甘蔗

〔通志〕

蔗有

三種赤崑崙蔗白甘蔗亦曰蠟蔗出
 燥者秋蔗

加筆ナラハ満

諸とシロバンスウハ徳の島よりハンゲン
云々として其の黒なる山を大なる島とある

甘藷皮種類を記す

一ムリキユ 田外白ムリキユハ山中名替り伊はね

一赤どり 皮赤中白

一八重山どり 皮赤中黄根大入早く熟す根白し

一トウカンダ 皮赤中黄根大くつて

一ヲギノドン 皮赤黄根

一ユウジヤツクハ 皮白中白芋

一ホウボ子 赤芋 形々長し

一ヤレバ 皮白 中黄

一十廿日 皮赤系

一ムノカキ 皮厚黄中山吹色系白印あり香白あり

畠に何種も種を内種がありあるとき
此芋を先き尋ねて食ふとふ

○甘藷苗乃事

苗草ハ草藷の如く草芋を埋めて其芽生

掛く柿うすし圖の如く餘泥を桶をもちげく
 一方の手は篋を運ぶ持て土を創起し
 一方の手は柿を押し込め桶底に大抵を寄
 附し柿を山田其外眼する地面は尺
 間も柿をいふ柿返しをもち事明く却
 と柿の根付けせし追て実入を致し事
 なり柿を草に柿を度々切りて実入
 せしむと云ふ







甘藷堀の事

甘藷と植付たる甘藷の如く十月比まで還
く未返しとして一度、取り事なすく三月比
植する草六月よりなすはアサリ^{ガイ}草と
異なり、國此妙の秋事、植のあけた
るものを以て堀初むる云、夜、堀のあり
お返しとして、四月より植する、七八
月より堀初め、比、其通る、とて七八月九

月、植する、とて七月まで、乃用おなり、右
の如く甘藷斗を、手、飯、おの目、當、
く、家、と、還、ふ、と、植、は、昔、作、の、年、に
実、入、能、なる、山、作、の、草、堀、と、の、と、を、
唐、草、の、十四、五、斗、の、と、用、お、り、の、
畠、の、唐、草、絲、大、く、なり、と、来、年、まで、自、田、の
と、草、腐、り、と、来、年、の、隙、と、得、に、他、人、へ、与、る、れ
と、夫、と、お、く、唐、草、人、の、草、植、の、畠、と、て、仕、方

加筆
十八日
満

るに在りといふ山作の時、雲月師去る
より廿廿を食居るゝと島民此時の難
喻るゝといふ。一人の飯料を月々唐芋
一及の畠より足ると云一年八割十二及の破り
なり依て唐芋畠迄分の者なり

一、甘藷ヲ堀テ根ノ形ヲ直ナラズ曲ナル年、曲多キナリト云道理潤得
リ、誤多キ年、此邊ヨリ故ニエテ分ルゝ急ナレハ直ニ延行、能畠ナリ
山作ノ年ハ僅宛太リ行テ地ヲ分テ根大ナル故直ナリ、依テ五月比根ヲ
堀テ見ルニ曲レル根ノ入年、島民喜悅スルナリ







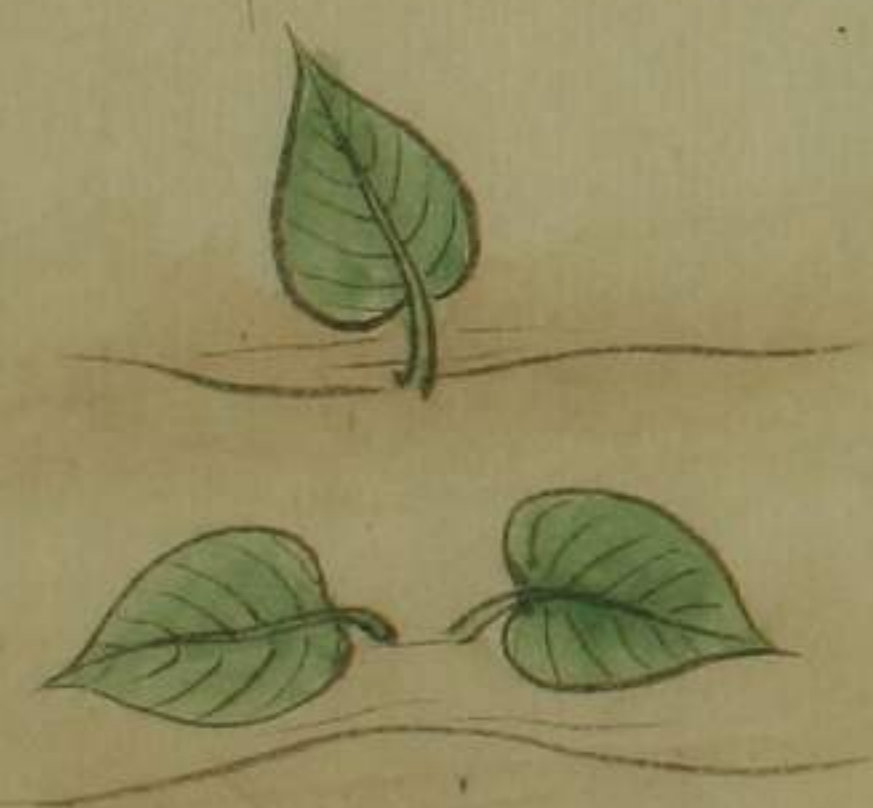
○甘藷二度生れ文

甘藷残赤返し想て芋を赤取りを後
 取^ありし芋出く桂^きなりと名をい
 根能入西風乃當うん所此^こ事あり山田
 拓^く克斯のめきなり

○ムキダ子の臭

甘藷の姓悪く^くなりく大島にたふ
 いびとつて^て即^す芋なりと名をい甘藷芋は臭

斗^とと地^ちさく^くまより桂^きと^と苗^{めう}芋に
 も^もとムキ種^{しゅ}といふ別^{べつ}る上品^{じゆんひん}の甘^{かん}藷^{しよ}も
 愛^{あい}より^{より}右^{みぎ}の地^ちさく^くなる^{なる}葉^はじり^りれ
 其^{その}の^のも根^ねと^と而^{なり}く^く揚^{よう}れ^る実^み入^いる^る也^{なり}



甘藷煮調の事

豊年此時の飯新度草と煮て其後之
其の食草少し不足と見るとき子シギヤナ
連煮する草浅実成しく食に子シギ
ヤナ草とダゴといふ所ありハノスバシと云
ふありまより不足は時草と粥をし
て食するも其の餌は実成へ味弱く搗焼
耐ふものにあらなり

唐草にて大島に後王は本院疎より後と明春宗
十上六年の當り南清の書留に相見得 院疎
院疎南同時に相渡 (附録) 稿

○耕芸度

附り 稻再熟の事

秋彼岸杓日前後三日を調へ稻を新く之を種
下しといふ十月中の南の秋に下人迄まて
惣て飯を食するなり又餅を搗て之を取遣
を此は東渡人のありて面餅をかき黒い
形に煮の支なりとて太教をふり夫々の
薪の街をいし門をおて餅を貰い廻るなり
終に其を煮止時とて賑ひぬき事なり外に
あしく出たぬ。又男は田地代をいれ
十月此比耕して亦苗を栽るとき耕をなり
畔の田打掃といふ作是の秋を畔より植る時

異類

田地の事と
田代といふ

の耕し、稀に牛耕馬耕し有り栽る時を女童
とも集りて大抵四寸間一株二三寸づつ栽
るなり栽る時歌有り聲を長く引て謡ふ
之を田植いといふ外哥を引いて別々ある
早稲は十二月、移栽晚稲は春彼岸の前後
に植ふ之を植付といふ田青の以字をとる之
もいといふ河り多敷といふ外又記す如て六
月、熟を氣候暖まる取芝アア了後芽
出て再植を之をまきいといふ又生といふ
やそふ之い初のものなりと實入よく味ど
といふ禁で能くはるとありば束を飯を焚て九
万疋染泊るいといふ能く獲あといふ右稲を刈る

時片手より稲一握づつ合せ一把として其一把を
三つ合一把とて之を一をむりといふ
一把の事島民一たむりといふなり記孝徳帝
大化二年正月の記に二十歩廣す一束を
順十順爲所祖稻二束二把所祖稻二十束
と記一束をつかたむりと假名をわくといふ
本田親字先生の記にこれを書きしなり田
一とつうとたむりあるといふや絶てり
は中上士の言葉も吾等傳へう通言るては
島といふ通あるや數多の至る家には
の人衆が島は後りといふ人傳の道稻
いらせ九族を分ち五穀を栽て作職を

勵しといふ是等の言をきき老ふれも其に
 付は符合したり其已前の人老新ふかよ
 いて用ゐたぬを我親に弟たりとて
 山に捨るといふは不孝家没落の事
 遠き方にもあるを今此事は驚かぬ
 其一たより此一抱をハツ製て一ツより一ツを束
 と云ふ束の箱斤目或拾五斤一ツより一ツを束
 四斤ありたり一束に束四斤の紙をいふる束
 束入束上は田地を畝に束の畝之又三束束田
 米を束あり田地一所の畝又さう即稱三束
 何米あるを於此石といふ

(此亦水田植付の図あり)
 満

一、マンチヤギン 芭蕉ノ作衣裳
 一、ワリシギン 赤しづしギン 冬ノ作衣裳
 一、ヲホウ袖 衣袋ノ袖ノ太キモノ
 一、ソデナギン 袖ノホソキヲ云

三縣とウツ圖

模模ヲ以テ

創名スルモノアリ
到名雅書也



鞆ヲ作ル圖



南鳴鶴録に載るも此の見字或は傳記爲人の傳を
圓正然も大場三島中に所々座敷ふれも書きしら
以事多し故に終編に圓し又檢遠付て書きし形
を予と拾い圓画を檢送いさまで臨教事し
分けれと大鳴うてあはる予と記し檢遠を考
出れと述、書載るが故に見南人主をを以見
たましく多れたる概に終編或冊并全圖を
度更ぬれも書しらをもの終編をを終編程
れ事し者終りあ画を檢送圓し主とて終編
れ々終りて主は書記あり終編ハ圓一冊難
記一冊鴻全圖再檢一冊又檢送一冊を主
主れ形利

唐世監トシモ昔ハ茶ニ似テハナク
花ヲ養フナレバ往古ヨリ花ヲ開
ラ見ルヲヤシキ身ノ節ヲ抑サシ又
カブヲ分種ルヲナリ倭ノ種ル如
サ監ニ異サ夢ニ似ルフトナシ

性水也ニ生ルヲヨシトス
寒ラハ大俵根台ノ如
水也ニ生シサ敷ヲナス



蜂房



竹数ニアリ其形
如圓ト重徳利等
形色アロモ又陶ノ
サ葉リニ似テ見難品
ナリ然共ニ厚クシテ
殻ヘハソフ子ヤスリ
大概カンナグ程ノ
石子ニナリ



口ノ方下ニナリ蜂
巣ヨリ出入ス

唐船金利所
漂着の國
唐船漂着の常
先舟より未朝船
諸難係分首尾
有之い地由りい節
本流所より付りい節
うそいけも候い節
南ふ八五こ



△候い支れ出差し
以家に向く有之
併安田記に子夜

漂着の唐船
小屋の國



大和木主





海に海に生る
 大和の者傷り
 蟹と形少く異



大和の者尺許三寸
 回り小をいハれす也



伊勢村にて、此水に
 新とある廻りなり、
 漕ぎ進むと、
 新れ島のほとり
 夕トトリト云



九月廿日
 伊勢村にて
 新とある廻りなり
 漕ぎ進むと
 新れ島のほとり
 夕トトリト云

注文



當海を芝島と云ふを以て國
東より切角海と云ふ者あり又吾輩人
秀島人といふれり者ありて文也
又多々此の處を以て漢
程のよりて軍學は田某
學大に概に奥深し極なり
といふも其言はれども馬
具大筒小筒甲冑迄求て
大島を以て其某と云はれ
是れ為る所れ由七十
有餘りて海を校つて
友より常業は極深を
用き塩を焚し其
志人、異は事多
神、氣は人
依之其言を以て
是則南洲無人
島といふ國

The illustration depicts a scene with three figures. A man in a green robe, with a blue sash and a sword at his waist, stands in the center, gesturing with his right arm. To his left, a woman in a brown robe looks on. In the foreground, a small child is visible. The background is simple, with a yellow cylindrical object on the right.

○南渡車ハ石原重祖父大為代左に帰帆し砌石到來法被方
方自多居宅に江を渡る也しり身上にありし物を喰味し一
武具も求めける張川國廣刀双る槍人刀數人ぬと贈付し
濱田長兵衛に贈りしは筒外也云詔飛物たり婦子南渡と云連に
身上多寶物とて刀と甲冑と云々事官原係に懸く貴物多奪りしと
○南河共人勅砌石余りし由き跪き事多く是年斗帳に御付
並り先と石原役と御付し物柄山極窮年とて百姓民共食物も無山
に入て木根草葉食り是以村近く石原と人の色者くありとく
つるし砌石交も折証やを難有し山中一統し事を速く味を付
し明かぬし大島と云々事即西国切に金利を切飯屋奉遠き故
に多故小と云々事裁急連し事候と云へ死すん事を恐れ
重し御裁打及御米を食窮し居れ砌りありと云へ吏政政候は
而先成し由



砂糖取引 飯屋之市
諸人集る
回

飯屋之市
其地人
出入并
其和妹
外
云云
中
あり



砂糖取引 飯屋之市
諸人集る
回





東朝唐船之年大島
 美利乃切来りし者
 如主江芸園云清人
 其園分香朴探同言

香朴
 樹



通人
 島人

唐人燕坂の時ハ
 移しの志を所々
 坐す



二張、竹穀ら如圖





出家の人と成りし時、此の
 前、少くもをさうな、又、
 出家は、おのの志、あれ、
 此、還俗、おのの志、あれ、



六月廿三日



観音
 六月廿三日
 六月堂の
 図
 貴久公之
 御位牌有





八月十日東側亭へ廻りて
 不三或ハ村中 西の方浪
 あり他界よりいさ
 幸事なり



○ 芳清 水、段、八、後、一、日、
 物、前、清、人、八、後、と、ま、り、
 舟、八、何、と、身、に、た、る、と、ま、

津口横目海、多
 近、中、田、舎、老、多、一



砂糖積
 入、る、家

大和船頭
 帰、帆、へ、る

水、立、降、地、下、へ、る

流人へ上通りなり子共とある
 系譜を教へ又い流人へ富家と
 老いあはれと流砂を流し
 算面を志し加路一筆れ
 其人と流人あはれ
 又家明家一筆れ
 自力の似知
 家傳を
 振
 ち
 た
 る
 あり
 印と大和
 17の多病
 流人へ不幸
 乃幸と云
 方一大酒女色
 返を流しへく地
 秋も分たも其
 の流し流し



一身の業を流世とある
 文とあるも流世とある

下通し流人
 同姓の流人
 ときとある
 春又とある
 流人へ不幸
 乃幸と云
 方一大酒女色
 返を流しへく地
 秋も分たも其
 の流し流し



中通流人
 今とある

ときとある
 春又とある
 流人へ不幸
 乃幸と云
 方一大酒女色
 返を流しへく地
 秋も分たも其
 の流し流し

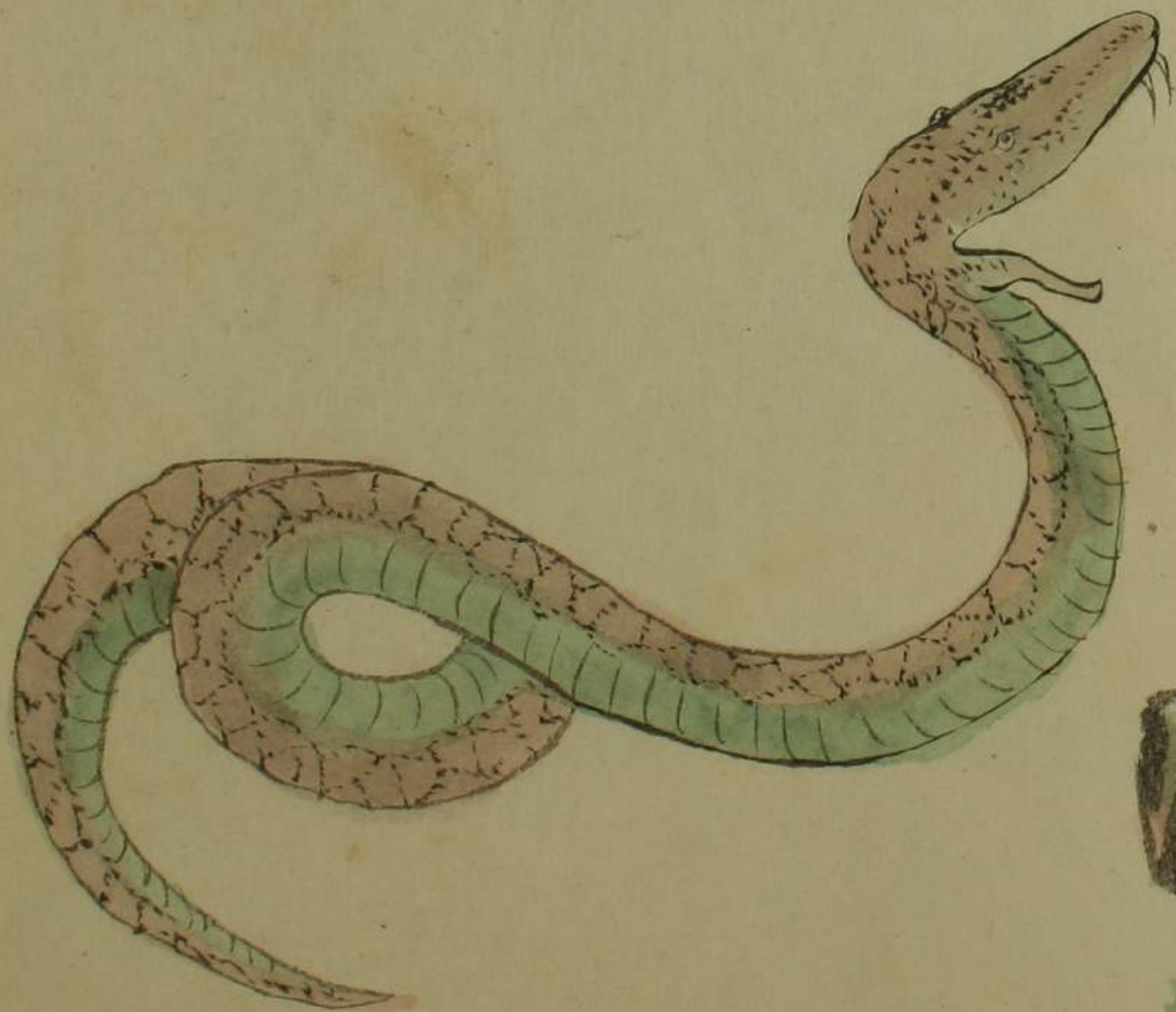




鳥を反鼻蛇を捕て食とまゝにマツタフト蛇あり
 反鼻蛇を足れい石神事にお供ふあり今
 夏、第ふす國の越の鳥の候の
 鳥を黒る事あり反鼻蛇
 を足とて蛇来て蛇の尾を
 痛を穿反鼻蛇起て
 噛んとすれい片や力
 羽を卸て差出す
 反鼻蛇を足と
 捕共羽をもと
 こたへなく土地
 を捕捕い飛込
 又飛あり或なり
 たたの羽を以て
 反鼻蛇あやづる事あるなり反鼻
 蛇つる候中成りくくなく後鳥
 かしく反鼻蛇を殺て肝を食



と殺て肝を穿破を
 食らるる見らん
 適途中より大なる
 反鼻蛇今を死する
 ことあり能見る事
 反鼻蛇乃を食
 破りあはれ候と食
 まんとす





色如朱
倭ノ桃極
一種

新江ノ見家
倭ノ桃極
ナリナリ木立
花ハ白
潤ク見
ヤスシ

百合
花大白四月花野生根
葉色深間有子崎人根
糸ノ高ト同種ニテ食
至テ上四ノ
產物ナリ



白頭翁 シロモヨス
伊津部 カニク
ムラニミル常
鴨トワジリ木
ノ實ヲクワシ

○マツリヨホ

子ハマロクニシテマツリヨホノ如ク熟スレハ実コハクニシテ不食
 半熟ニシテ皮ヲ去レハサイコクノ米ノ如味淡薄ニシテ倭ニモアリ
 飢タルトキノ食物ニハ可然併大島ノ木立
 丈余ナリ皮ハ焼物ヲ造ル陶物葉ニ用
 灰ハ本琉球ヨリ買ニ来ルナリ



○ハル子ノ外皮去リ子白ニシテ
 ツギ粉圓ヲツクリ飢ヲタス

ハル

造ル陶物葉ニ用
 灰ハ本琉球ヨリ
 買ニ来也

女ハ皆如圖様執
 金馬車ノリ



山嶽名
嶋詞



木の形倭の椎代木と略
お似そ柔少少常盤木なり
其柔明櫨をもち用ふ時
其柔事とた、き漆物と入色
柔ありと、さしと、漆と、
と、人の明櫨をうへ用花
香遠々、効り、七、中、云

二千九百

井井井井

井井井井

二口文海

田又ハ瀛河の土乃膏なり又清河篇となく清と
 対ハ篇を介してのむきなり清と其土乃清と
 介在ハなく清の穢女とく見ゆるは泥の膏と
 と千ヤリ云

ハツケリキ澤

ハツクワキハ色ヒロキヨリ
トシタニ色ハツクワキ、
皮ヲセンシ捺ス

ハニノミヤ

ハレノ木ノシシヲ削リセバ其汁ニ所ナ地際トス

カキナソメ

ガキ十ト云州アリ昆ラセンジ染ム

トイモノ汁藻

サトイモカウノ汁ヲ以テ洗フ

本、又、芝の場、又、土を取、又大泉載

洗ふ、其ぬみ、牙、襟、色、も、落、色、又、と、多、く、こ、こ、に、其、
 織、子、乃、足、と、火、牙、に、り、藍、染、の、度、藍、を、其、色、を、染、
 同、く、併、敷、夜、も、藍、色、と、あ、う、せ、洗、え、の、襟、染、と、洗、
 九、七、篇、其、の、け、ん、の、本、綿、糸、引、切、の、糸、の、中、外、と、同、
 色、な、れ、あ、る、に



○大砲鍛錬家
川崎家の大砲南洲
傳佐々木其後南洲
祖天保と能く今に
活人といふ鍛錬家
なり



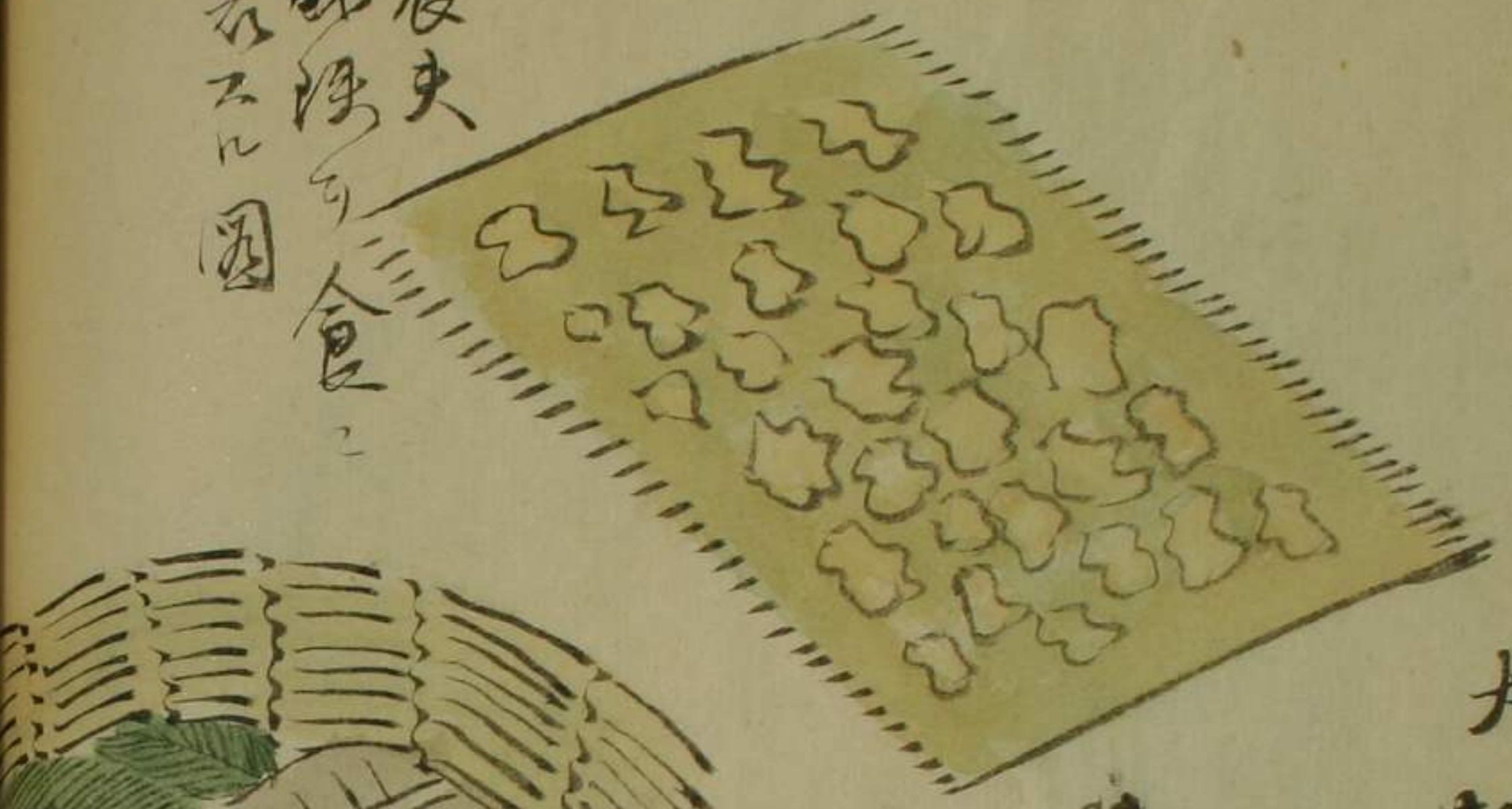
ナベウ係ノナメクジリ
大サメ國指行
見付本ノ中子三ッ
四ッ居

笠利の切者
製衣に玉子泥
官

イガサ



農夫
蘇鉄ノ食
料スル図



蘇鉄ノ皮去
大切スル図



蘇鉄
七日水
漬置テ後
土地イキヲ
付ル図



サ鉄決目ノ當テ
後切ラツ
図



大切ノサ鉄鉄ヲ
河津漬毒ニ系
リ去ル図



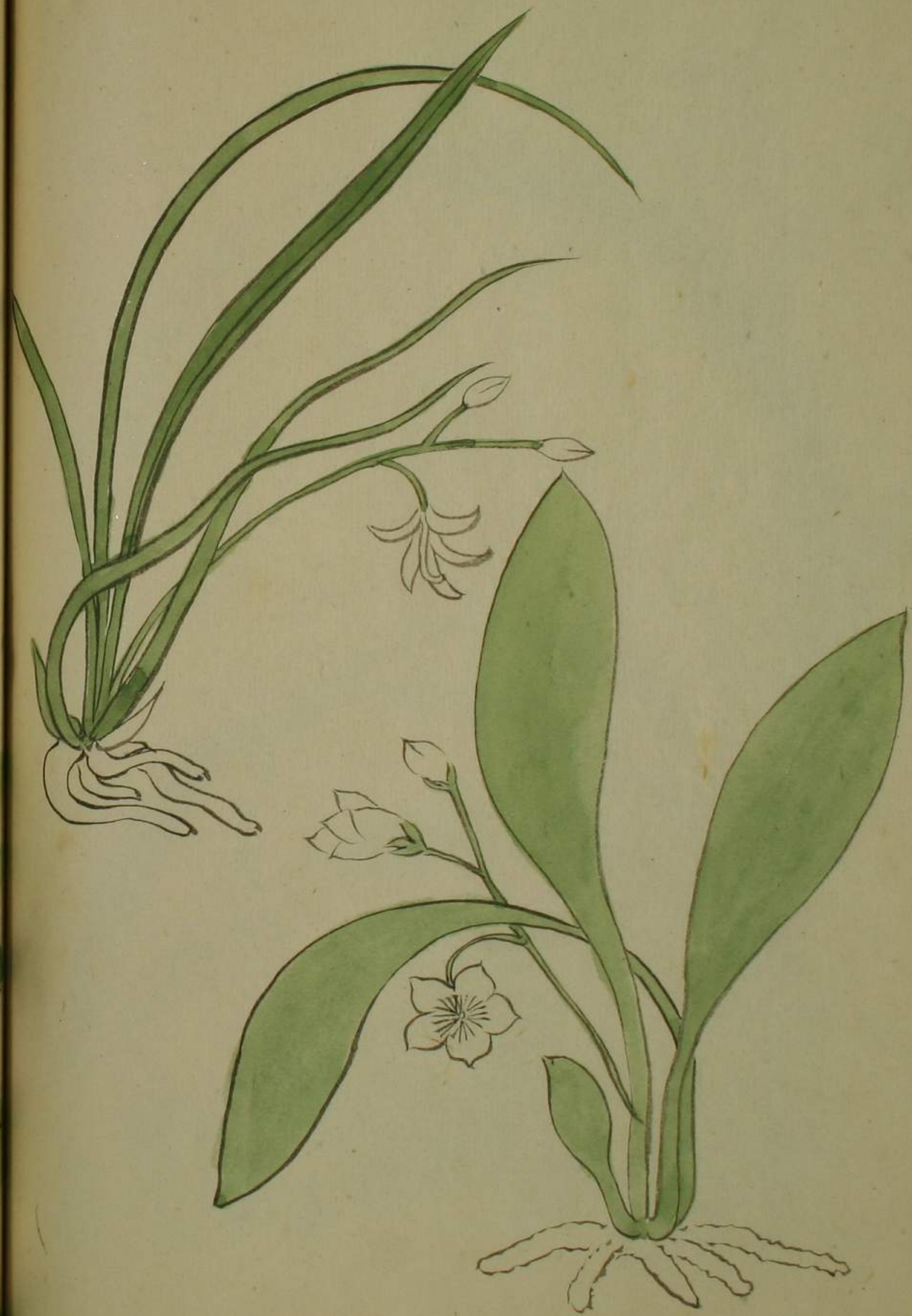
鉢植蘇鉄之事

鉢植を多くいへば枝振勝れたる蘇鉄あり是は片下り
 たる畑へ必ず有事なり此は片下りたるは山崩たるを蘇鉄
 後を埋むことあり其埋むたら蘇鉄数年地中に有て
 耐えしと子を生し大に成るを得す此は近たるを
 出し貯出す事あり又を取て下等に植置は少く葉
 出て勝れたるものなるなり或人の誇りし然と能く
 進みの蘇鉄を切り根の方を長く地中に埋め置
 けむ此鉢植の蘇鉄出るとを

白か子花









大工砂糖
車ラ做
圖



琉球ノ製ニ不異
至テ好

屠豚奴
村童呼渾名
家人惡短艷



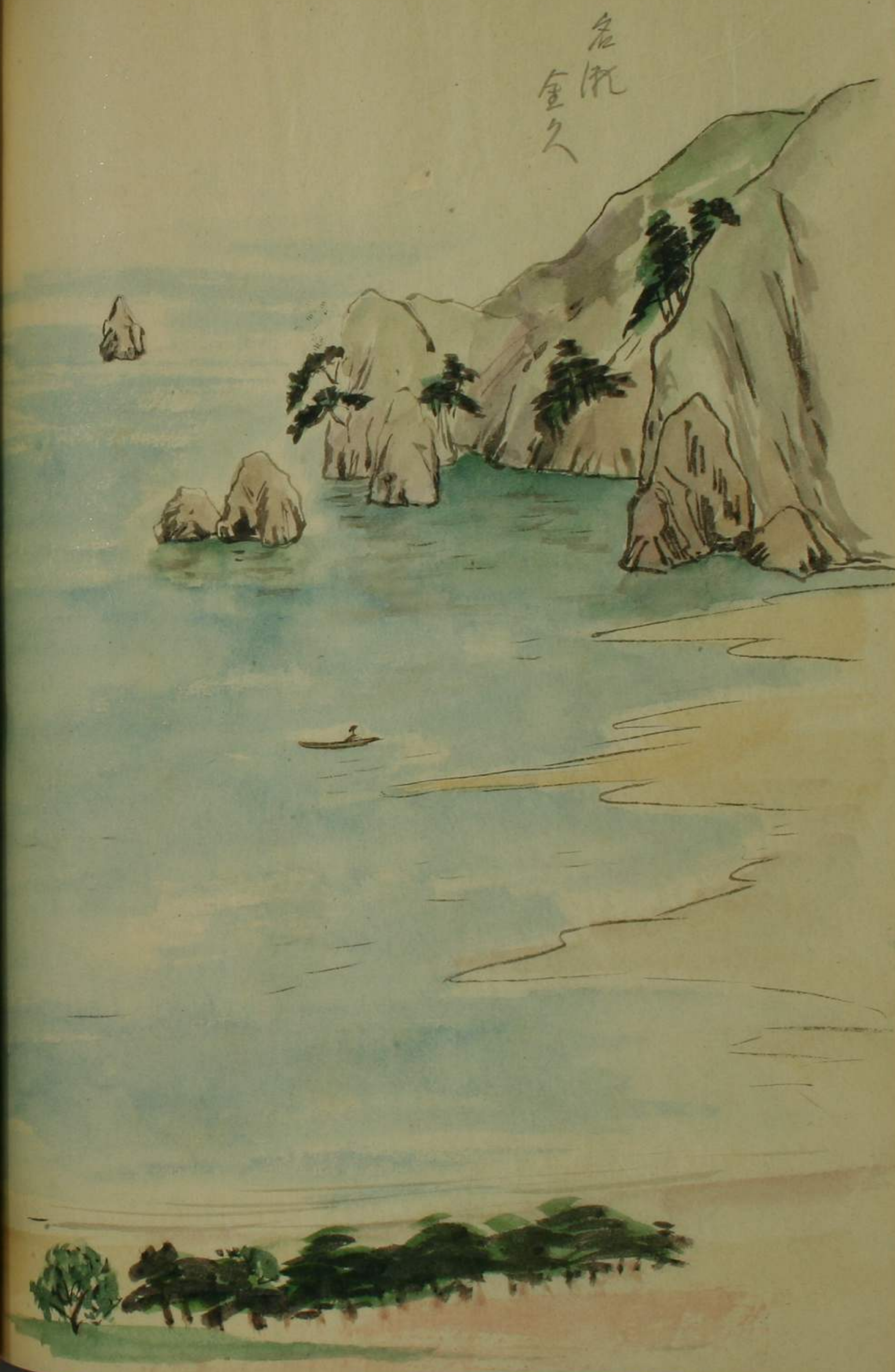
本是狐明物堂此類
生産此依爲き今と琉球
豚乃製法俗今島中
此酒し一日共しとさる
と晦めれと子豚の隠
せ切し爲村人子痛
な



桃梨生園門
從風飛千里

疏疎より出奔し大嶋を来るもの乃ち何う大園に
あると云ねりこれ園よりと諺をうゝひ三綿を
いふ世に





胡婦飽牛肉

蒼蠅群
了盤汗斗柄



胡婦飽牛肉

醉漢同蘭陵
胡燕諫明渠

烈女執斧殺遊棍





大和の諸役見ゆ此圖

東の諸役
作務う米
出入
河邊に
村中三男四女
輝り穀米
揚



河邊の配
米と配
田の図



史官室手治
鯨人昇珠拜

時處を風俗を留るもの
 滞りの間、國の
 如く、ちねの珍族
 笑の化をみるわ
 列大名の如く大山崎
 常より人知を法藏
 人佐屋附等の如く
 一してこころ
 刀蘭下、道奥の流波
 の同布と云ねた事
 本邦田舎行のちね
 百姓とては同布となつて同



金簪映日明
武威越年重

高の頭後の
 行列い如國お
 傷はこれとて
 なく只雨雲日
 面映るちひ
 まるなり



使君庵有慶園
有慶と云者、大なる庭園に人々を
俗に風を吹く事、物又、出入の便
又成、物車、又、木口車、
又、夫、作、出、し、又、喜、界、島、
又、そ、り、作、方、指、南、し、

市と目出、自、宅、子、植、
果、風、
持、行、

東流、
何、
誰、
何、

牝馬一夜生双角
獨夫子裁得富貴





久高之人大島
来水良部鰻
魚取

產婦之圖



之幾也



尺八鳩之図



名不詳

鳥は程如鷹鷹より足は凡そ長し六尺其形
如鳥大なり是は程程して喰ふは味拾別
ふ宜しし因あめりて獸の肉はこし





嶋人山獺





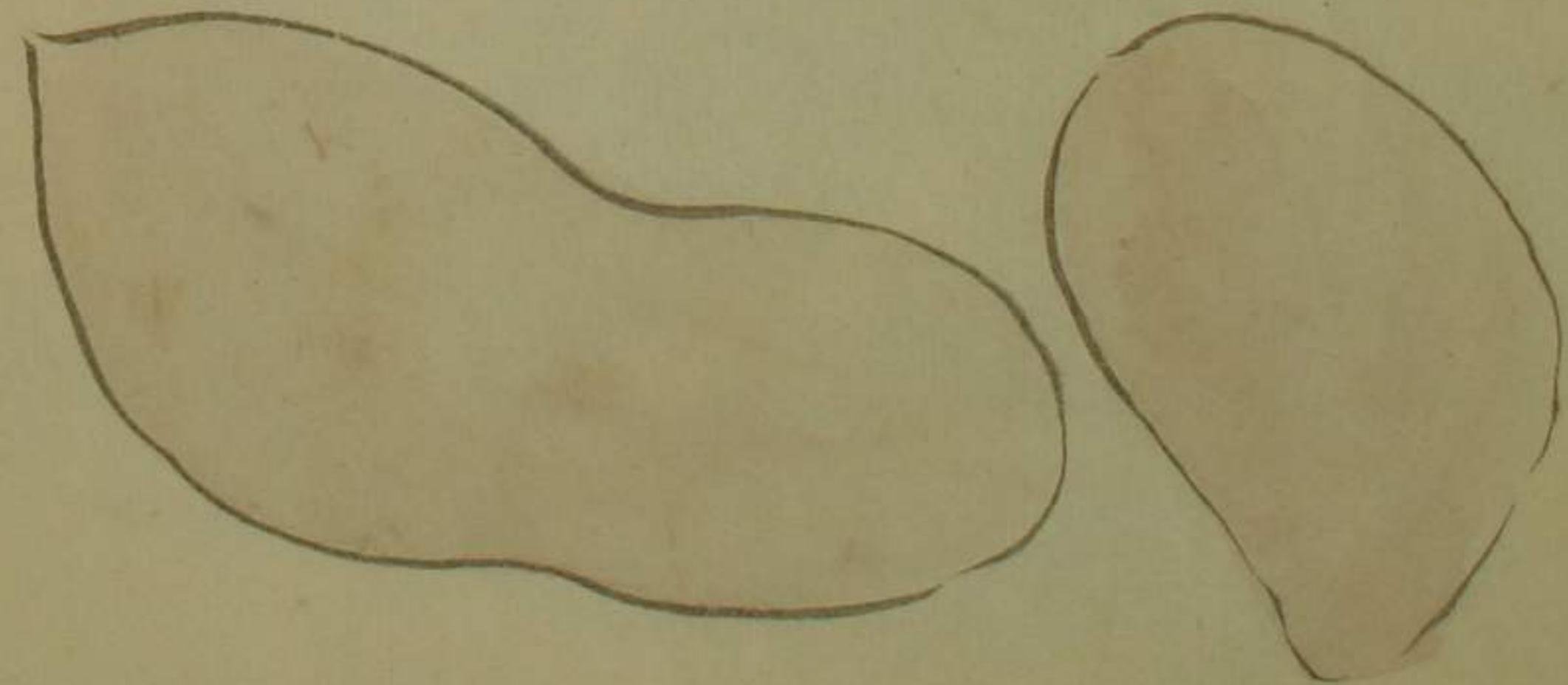
茄子



蒜

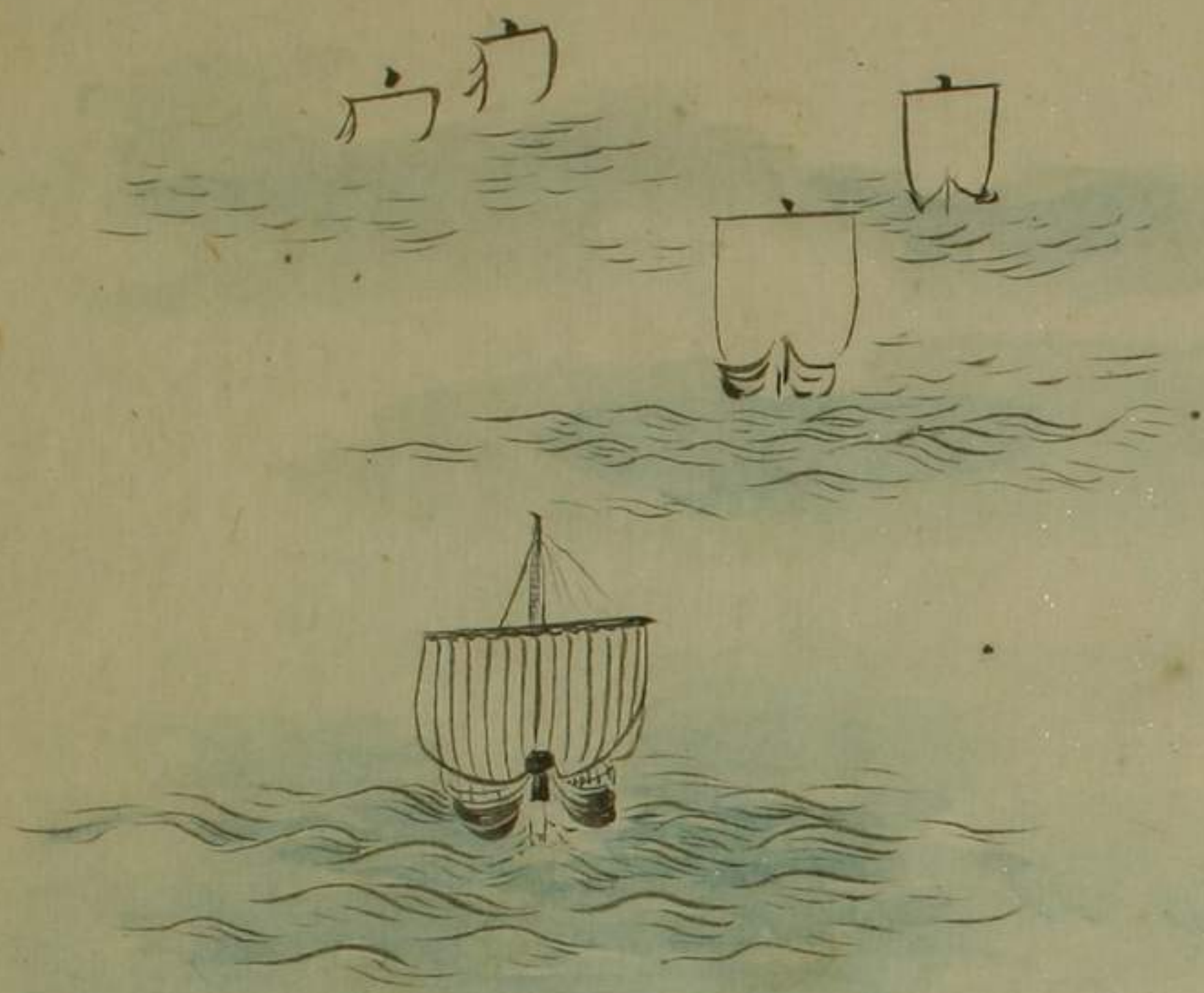


木の葉はくとも大井百舌
 程なり鴝鵒一種あり
 大鳥といひヤツクホと云
 鳥人然らば一卵卵む
 こころく馬蹄
 跡は葉くし
 出れあつめ
 自乃形と作
 子となに後
 知所と云此説
 不詳



農大織席組社





嶋民役人大和詰役
交代迎船局



島人
相儂



酒後必つて
その由

酒後必つて
その由





群遊此景
何処に集り淫踊如景

島人の
家宅の
裏



嶋中原より此
堂に所作の如き



サメナシコウ以勝負ヲ
キロメ荷物ヲニナウテ
負ル者到ル所



多婦の留る夜も
 とりゆき谷川なと
 まあつちあそび
 流るあそび
 大和のあそび
 早稲の山川
 石を里中
 大和のあそび
 石を里中



家雞雌雄
 夜宿屋上



流人買上云
 強法為利失
 流人彦ふき
 あし海にまき
 なるるる
 送る者あり如界



拐児露出馬脚

流人案多し
 かくし難き人もの
 妻ありとて海に
 織少海に織たり
 ありありとあり



蜂く備と云ふあり蜂と好く
 食ふも此大やそは徳をいふ
 かしちつさ



白撞 ヒルヌヒト捕る事

流人論となん
 といふ事ある
 多しと見えむ
 され命なり
 助りやれ
 行ふあり



トウ
 カンモレ

田
刈



田
植

悉く春作に
今更なる





○久呂津隅

授欄ヲ赤津隅ト云

用由久呂津隅のありて所
より採りて水と煮てふき
ふ湯薬のほろろと
人々其のめしなりと云
○葉の大なるもの大
赤天候

此の草は、大和漢方なり
考あり、西観は、つくと、
なり、是れ、大和漢方、人々
を、乃、之、細く、面と、土、氏
なり、
多景、子孫、
多乃、所、
今、多、
き、

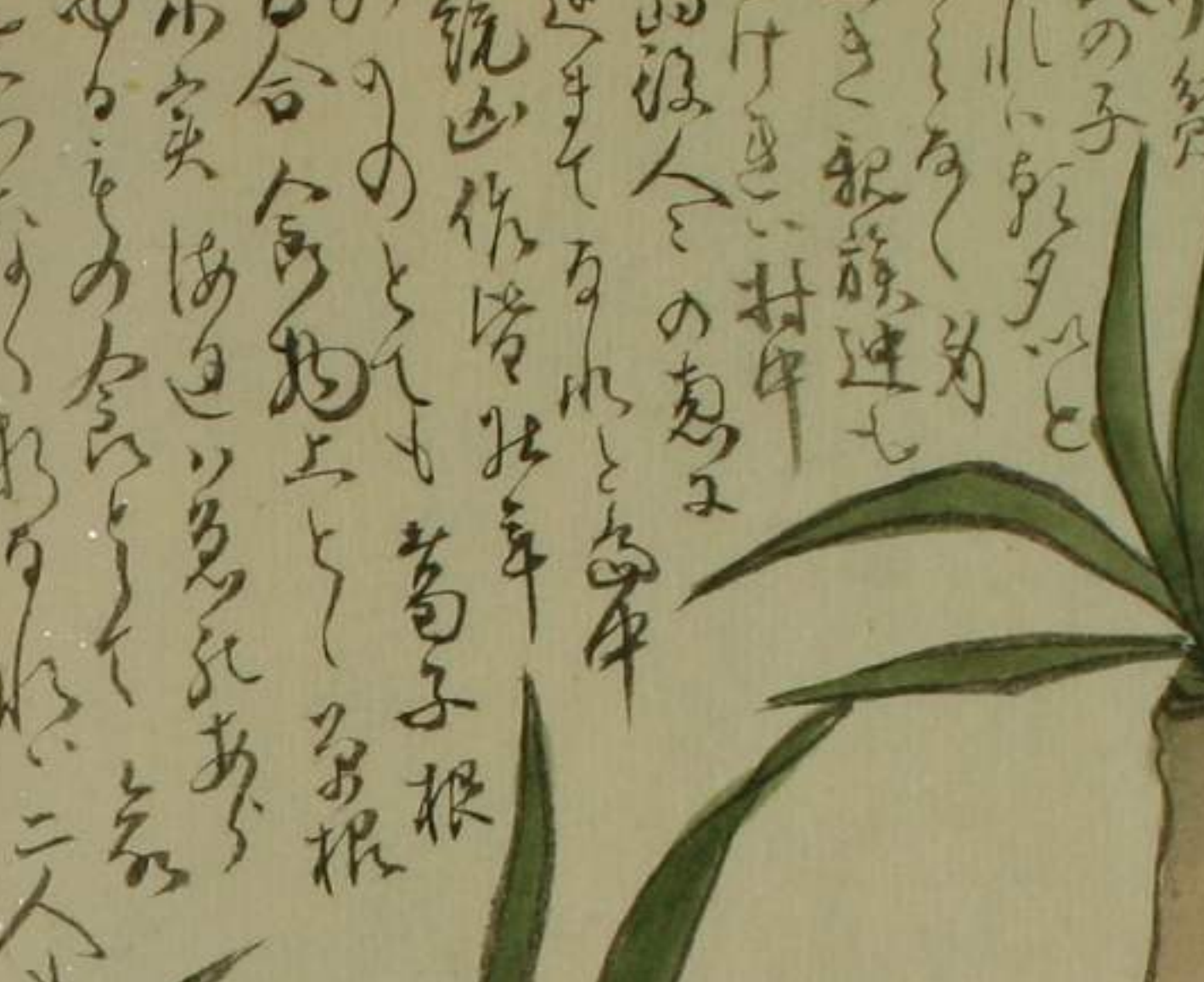




大風舟と尾の上吹上り
 甘き可なり
 本徳子番記
 船の引揚
 るに
 まし
 福

江村名之郎 何尾の

元七
 文孝
 民の子
 るに
 由き
 多け
 島渡
 逸年
 一統
 のり
 石合
 亦実
 やる
 とつ
 つち

[illegible]

島に女とて海人原
 とて國島女と
 風をよみとも
 衣類をよみ入
 又海河よみと
 如國衣類をよみと
 海人よみと



カンラン
 〇橄欖木
 魚毒解ス
 妙也葉茶
 代味宜し

龍眼肉



レイシ
ホウトウ、
葉畧
似タリ

大島乃童女此花をインノヒと云花石間の一種
野に生花紅落色二種あり子秋より冬
至り熟む色紫黒ク子ハ村童ツ
味ニアヤシ

○山中ニ多ク
生スホウトウ



花大サ白
桃ノ如シ夏祭
紅色大和漬ヨリ深山途中
ニニ適是ヲ見タリウス飯ノ
モ、甚タ多



洞貝海中生、貝
 石、貝乃其の殻とぬく
 とさ、い、う、み、な、を
 う、う、こ、や、日、初、目、お、な
 か、振、り、け、と、と、は

わ、う、の
 味、う、た、れ、う、れ、大、ひ、る、い、ん、ん
 ま、や、う、ん、の、代、日、用、ひ、甚、要、子
 一、強、と、け、用、也
 出、た、は、大、を、焚、く、と
 ち、い、も、や、ち、中、
 の、お、れ、れ、ふ、事、多、く
 る、る、雅、な、る、り



天目白焼文ある、これと、後、の、う、ま、ひ、と、い
 う、ち、と、所、を、さ、し、め、う、ま、ひ、の、お、先、う、ま、に、通、る、
 土、焼、り、大、さ、の、お、飯、後、の、こ、と、至、て、終、く
 文、の、取、
 か、し
 裏、表
 より、く
 や、う、方
 め、く、具
 ら、わ、し
 ら、ま、る、
 う、ま、し



黄金乃、極、大、の、品、う、目、あ、く
 う、し、名、珠、人、買、う、れ、一、萬、金
 杯、と、見、た、り

此、の、焼、き、の、
 め、一、条、底、あ、つ、し

赤、松、の、
 ら、い、と、
 振、り、う、り、も
 所、同、と、い、ふ



島流役
廻島之節
清浄之図



文政十一年ニ成ルル報生書ナリト云、宛本一モ付ハラズ
大島々底ニ付ハルモ、四巻アリ、一時ニ又同一人ノ
手ニ成レルニアラズ、當節一ノ作アリシニ倣ヒテ
補足シ又書留メタルニ、ソノ何レノ部カガ
何ト歟セウシテ、何人ノ手ニサレカハ明カナラヌコト
ナリ

